

民事訴訟法

司法省記錄文庫

第四百七十五號  
五冊ノ内

第一號

第二架

第六

司法省

第五〇號

寄贈圖書文庫

XB500

M II

I



民事訴訟法



民事訴訟法目錄

第一編 總則

第一章 裁判所

第一節 裁判所ノ物上ノ管轄

第二節 裁判所ノ土地ノ管轄

第三節 管轄裁判所ノ指定

第四節 裁判所ノ管轄ニ付テ

ノ合意

第五節 裁判所職員ノ除外及ヒ

忌避

第六節 検事ノ立會

第二章 當事者

第一節 訴訟能力

至自 第第 四四 十十 八四 條條	至自 第第 四四 十十 三三 條條	至自 第第 四四 十十 二二 條條	至自 第第 四四 十十 一一 條條	至自 第第 三三 十十 一一 條條	至自 第第 二二 十十 八八 條條	至自 第第 二二 十十 六六 條條	至自 第第 二二 十十 五五 條條	至自 第第 四四 十十 三三 條條	至自 第第 百 一 十 十 條條
----------------------------------	----------------------------------	----------------------------------	----------------------------------	----------------------------------	----------------------------------	----------------------------------	----------------------------------	----------------------------------	------------------------------------

正誤

八十二頁 裏三行目 其地へ其他  
 百五十八頁 表四行目 第六百八十八條へ 第六百三十六條

XB500  
M 11  
|



第二節 共同訴訟人  
 第三節 第三者ノ訴訟參加  
 第四節 訴訟代理人及ヒ輔

佐人

第五節 訴訟費用

第六節 保證

第七節 訴訟上ノ救助

第三章 訴訟手續

第一節 口頭辯論及ヒ準備

書面

第二節 送達

第三節 期日及ヒ期間

第四節 懈怠ノ結果及ヒ原狀

至自 至自 至自  
 第第 第第 第第  
 百百 百百 百百  
 七五 六四 七三  
 十十 十十 十十  
 三二 一四 二四  
 條條 條條 條條

至自 至自 至自 至自 至自  
 第第 第第 第第 第第 第第  
 百百 百百 百百 百百 百百  
 九百 九百 八百 八百 七百  
 十十 十十 十十 十十 十十  
 三二 一八 七三 七三 二四  
 條條 條條 條條 條條 條條

至自 至自 至自  
 第第 第第 第第  
 百百 百百 百百  
 七六 五三 三三  
 十三 十九 十六  
 條條 條條 條條

回復

第五節 訴訟手續ノ中斷及ヒ中止

第二編 第一審ノ訴訟手續

第一章 地方裁判所ノ訴訟手續

第一節 判決前ノ訴訟手續

第二節 判決

第三節 闕席判決

第四節 計算事件、財産分別及ヒ此

ニ類スル訴訟ノ準備手續

第五節 證據調ノ總則

第六節 人證

第七節 鑑定

第八節 書證

至自 至自 至自 至自 至自 至自 至自 至自 至自  
 第第 第第 第第 第第 第第 第第 第第 第第 第第  
 百百 百百 百百 百百 百百 百百 百百 百百 百百  
 九百 九百 九百 九百 九百 九百 九百 九百 九百  
 七十一 七十一 七十一 七十一 七十一 七十一 七十一 七十一 七十一  
 十三 十三 十三 十三 十三 十三 十三 十三 十三  
 條條 條條 條條 條條 條條 條條 條條 條條 條條

至自 至自 至自 至自 至自 至自 至自 至自 至自  
 第第 第第 第第 第第 第第 第第 第第 第第 第第  
 百百 百百 百百 百百 百百 百百 百百 百百 百百  
 七十六 七十六 七十六 七十六 七十六 七十六 七十六 七十六 七十六  
 十七 十七 十七 十七 十七 十七 十七 十七 十七  
 條條 條條 條條 條條 條條 條條 條條 條條 條條



第九節	檢證	自第三百五十八條
第十節	當事者本人ノ訊問	自第三百六十一條
第十一節	證據保全	自第三百六十六條
第二章	區裁判所ノ訴訟手續	自第三百七十四條
第一節	通常ノ訴訟手續	自第三百七十七條
第二節	督促手續	自第三百八十二條
第三編	上訴	自第三百九十三條
第一章	控訴	自第三百九十八條
第二章	上告	自第四百零五條
第三章	抗告	自第四百一十六條
第四編	再審	自第四百二十四條
第五編	證書訴訟及ヒ爲替訴訟	自第四百五十四條
第六編	強制執行	自第四百七十四條

第一章	總則	自第五百七十三條
第二章	金錢ノ債權ニ付テノ強制執行	自第五百七十七條
行		
第一節	動産ニ對スル強制執行	自第五百七十九條
第一款	通則	自第五百八十四條
第二款	有體動産ニ對スル強制執行	自第五百八十九條
執行		
第三款	債權及ヒ他ノ財産權ニ對スル強制執行	自第五百九十四條
第四款	配當手續	自第六百零九條
第二節	不動産ニ對スル強制執行	自第六百一十八條
第一款	通則	自第六百二十三條
第二款	強制競賣	自第六百五十四條



第三款 強制管理

自第七百二十八條  
至第七百二十九條

第三節 船舶ニ對スル強制執行

第三章 金錢ノ支拂ヲ目的トセサル

債權ニ付テノ強制執行

自第七百四十二條  
至第七百四十九條

第四章 假差押及ヒ假處分

第七編 公示催告手續

自第七百七十五條  
至第七百七十六條

第八編 仲裁手續

自第七百九十七條  
至第八百十七條

民事訟訴法

第一編 總則

第一章 裁判所

第一節 裁判所ノ物上ノ管轄

第一條 裁判所ノ物上ノ管轄ハ帝國裁判所構成法ノ規定ニ從  
フ

第二條 訴訟物ノ價額ニ依リ管轄ノ定マルキハ以下數條ノ規  
定ニ從フ

第三條 訴訟物ノ價額ハ起訴ノ日時ニ於ケル價額ニ依リ之ヲ  
算定ス

果實收入、利息、損害賠償及ヒ訴訟費用ハ法律上相牽連スル主  
タル請求ニ附帶シ一ノ訴ヲ以テ請求スルキハ之ヲ算入セス

第四條 一ノ訴ヲ以テ數箇ノ請求ヲ爲スルハ前條第二項ニ揭



クルモノヲ除クノ外其額ヲ合算ス

本訴ト反訴トノ訴訟物ノ價額ハ之ヲ合算セス

第五條 訴訟物ノ價額ハ左ノ方法ニ依リ之ヲ定ム

第一 債權ノ擔保又ハ債權ノ擔保ヲ爲ス從タル物權カ訴訟物ナルキハ其債權ノ額ニ依ル但物權ノ目的物ノ價額寡キキハ其額ニ依ル

第二 地役カ訴訟物ナルキハ要役地ノ地役ニ依リ得ル所ノ價額ニ依ル但地役ノ爲メ承役地ノ價額ノ減シタル額カ要役地ノ地役ニ依リ得ル所ノ價額ヨリ多キキハ其減額ニ依ル

第三 賃貸借又ハ永貸借ノ契約ノ有無又ハ其時期カ訴訟物ナルキハ爭アル時期ニ當ル借賃ノ額ニ依ル但一个年借賃ノ二十倍ノ額カ右ノ額ヨリ寡キキハ其二十倍ノ額

ニ依ル

第四 定時ノ供給又ハ收入ニ付テノ權利カ訴訟物ナルキ

ハ一个年收入ノ二十倍ノ額ニ依ル但收入權ノ期限定マリタルモノニ付テハ其將來ノ收入ノ總額カ二十倍ノ額ヨリ寡キキハ其額ニ依ル

第六條 訴訟物ノ價額ハ必要ナル場合ニ於テハ第三條乃至第

五條ノ規定ニ從ヒ裁判所ノ意見ヲ以テ之ヲ定ム

裁判所ハ申立ニ因リ證據調ヲ命シ又ハ職權ヲ以テ檢證若クハ鑑定ヲ命スルヲ得

第七條 地方裁判所ノ判決ハ其事件區裁判所ノ物上ノ管轄ニ屬ス可キノ理由ヲ以テ之ニ對シ不服ヲ申立ツルヲ得ス

第八條 物上ノ管轄ニ付キ區裁判所又ハ地方裁判所カ管轄違ナリト言渡シ其言渡確定シタルキハ此裁判ハ後ニ其事件ノ



繫屬ス可キ裁判所ヲ羈束ス

第九條 地方裁判所カ物上ノ管轄違ナリトシテ訴ヲ却下スル  
キハ原告ノ申立ニ因リ同時ニ判決ヲ以テ原告ノ指定シタル  
自己ノ管轄内ノ區裁判所ニ其訴訟ヲ移送ス可シ  
區裁判所カ物上ノ管轄違ナリトシテ訴ヲ却下スルキハ同時  
ニ判決ヲ以テ其訴訟ヲ所屬ノ地方裁判所ニ移送ス可シ  
移送ノ申立ハ判決ニ接着スル口頭辯論ノ終結前ニ之ヲ爲ス  
可シ  
移送言渡ノ判決確定シタルキハ其訴訟ハ移送ヲ受ケタル裁  
判所ニ繫屬スルモノト看做ス

第二節 裁判所ノ土地ノ管轄(裁判籍)

第十條 人ノ普通裁判籍アル地ノ裁判所ハ其人ニ對スル總テ  
ノ訴ニ付キ管轄ヲ有ス但訴ニ付キ專屬裁判籍ヲ定メサル場

合ニ限ル

人ノ普通裁判籍ハ其住所ニ依テ定マル

第十一條 軍人、軍屬ハ裁判籍ニ付テハ兵營地若クハ軍艦定繫  
所ヲ以テ住所トス但此規定ハ豫備後備ノ軍籍ニ在ル者及ヒ  
兵役義務履行ノ爲メノミニ服役スル軍人、軍屬ニ之ヲ適用セ  
ス

第十二條 外國ニ在テ治外法權ヲ有スル帝國官吏其家族及ヒ  
從者ノ裁判籍上ノ住所ハ本邦ニ於テ本人ノ最後ニ有セシ住  
所ナリトス此住所ナキモノニ付テハ司法大臣ノ命令ヲ以テ  
豫メ定ムル東京内ノ區ヲ以テ其住所ナリトス  
第十三條 內國ニ住所ヲ有セサル者ノ普通裁判籍ハ本人ノ現  
在地ニ依テ定マル若シ其現在地ノ知レサルカ又ハ外國ニ在  
ルキハ其最後ニ有セシ內國ノ住所ニ依テ定マル



然レモ外國ニ住所ヲ有スル者ニ對シテハ內國ニ於テ生シタル權利關係ニ限り前項ノ裁判籍ニ於テ訴ヲ起スヲ得

第十四條 國ノ普通裁判籍ハ訴訟ニ付キ國ヲ代表スル官廳ノ所在地ニ依テ定マル但訴訟ニ付キ國ヲ代表スルニ付テノ規定ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

公又ハ私ノ無形人及ヒ其資格ニ於テ訴ヘラル、ヲ得ル會社其他ノ社團又ハ財團等ノ普通裁判籍ハ其所在地ニ依テ定マル此所在地ハ別段ノ定ナキハ事務所所在ノ地トス若シ事務所ナキハ又ハ數所ニ於テ事務所ヲ取扱フキハ其首長又ハ事務擔當者ノ住所ヲ以テ事務所ト看做ス

第十五條 生徒、雇人、營業使用人、職工、習業者其他性質上一定ノ地ニ永ク寓在ス可キ者ニ對スル財産權上ノ請求ニ付テノ訴ハ其現在地ノ裁判所ニ之ヲ起スヲ得

兵役義務履行ノ爲メノミニ服役スル軍人、軍屬ニ對シテハ其兵營地若クハ軍艦定繫所ノ裁判所ニ前項ノ訴ヲ起スヲ得

第十六條 製造、商業其他ノ營業ニ付キ直接ニ取引ヲ爲ス店舗ヲ有スル者ニ對シテハ其店舗所在地ノ裁判所ニ營業上ニ關スル訴ヲ起スヲ得

前項ノ裁判籍ハ住家及ヒ農業用建物アル地所ヲ其所有者、用益者又ハ賃借人トシテ利用スル者ニ對スル訴ニ付テモ亦之ヲ適用ス但此訴カ地所ノ利用ニ付テノ權利關係ヲ有スルキニ限ル

第十七條 內國ニ住所ヲ有セサル債務者ニ對スル財産權上ノ請求ニ付テノ訴ハ其財産又ハ訴ヲ爲シテ請求スル物ノ所在地ノ裁判所ニ之ヲ起スヲ得

第十八條 契約ノ成立若クハ不成立ノ確定又ハ其履行若クハ



銷除、廢罷解除又ハ其不履行若クハ不十分ノ履行ニ關スル賠償ノ訴ハ其訴訟ニ係ル義務ヲ履行ス可キ地ノ裁判所ニ之ヲ起スヲ得

第十九條 會社其他ノ社團ヨリ社員ニ對シ又ハ社員ヨリ社員ニ對シ其社員タル資格ニ基ク請求ノ訴ハ其會社其他ノ社團ノ普通裁判籍アル地ノ裁判所ニ之ヲ起スヲ得

第二十條 不正ノ損害ノ訴ハ責任者ニ對シ其行爲ノアリタル地ノ裁判所ニ之ヲ起スヲ得

第二十一條 辯護士又ハ執達吏ノ手数料及ヒ立替金ニ付キ其委任者ニ對スル訴ハ訴訟物ノ價額ノ多寡ニ拘ハラヌ本訴訟ノ第一審裁判所ニ之ヲ起スヲ得

第二十二條 不動産ニ付テハ其所在地ノ裁判所ハ總テ不動産上ノ訴殊ニ權原並ニ占有ノ訴及ヒ分割並ニ經界ノ訴ヲ專ラ

ニ管轄ス

地役ニ付テノ訴ハ承役地所在地ノ裁判所專ラニ之ヲ管轄ス

第二十三條 不動産上ノ裁判籍ニ於テハ債權ノ擔保ヲ爲ス從

タル物權ニ基ク不動産上ノ訴ニ附帶シテ同一被告ニ對スル債權ノ訴ヲ起スヲ得

不動産上ノ裁判籍ニ於テハ不動産ノ所有者若クハ占有者ニ對スル人權ノ訴又ハ不動産ニ加ヘタル損害ノ訴ヲ起スヲ得

第二十四條 相續權、遺贈其他死亡ニ因テ効果ヲ生スル處分ニ基ク請求又ハ相續分割ノ訴ハ遺產者死亡ノ時普通裁判籍ヲ有セシ裁判所ニ之ヲ起スヲ得

相續裁判籍ニ於テハ遺產債權者ヨリ遺產者又ハ相續人ニ對スル請求ノ訴ヲ起スヲ得但遺產ノ全部又ハ一分カ其裁判



所ノ管轄區内ニ存在スルキ又ハ相續人數人アリテ未タ遺產  
ヲ分タサルキニ限ル

第二十五條 原告ハ數箇ノ管轄裁判所ノ中ニ就キ選擇ヲ爲ス  
得

### 第三節 管轄裁判所ノ指定

第二十六條 管轄裁判所ノ指定ハ帝國裁判所構成法ニ定メタ  
ル場合ヲ除クノ外不動産上ノ裁判籍ニ於テ訴ヲ起ス可ク且  
不動産カ數箇ノ裁判所ノ管轄區内ニ散在スルキ亦之ヲ爲ス  
第二十七條 管轄裁判所ノ指定ニ付キ申請ヲ爲ス場合及ヒ其  
決定ヲ爲ス裁判所ハ帝國裁判所構成法第十三條ノ規定ニ從  
フ

第二十八條 管轄裁判所ノ指定ニ付テノ申請ハ書面又ハ口頭  
ヲ以テ其申請ニ付キ管轄權ヲ有スル裁判所ニ之ヲ爲スヲ得

得

右裁判所ハ口頭辯論ヲ經スシテ其申請ヲ決定ス

管轄裁判所ヲ定メタル決定ニ對シテハ不服ヲ申立ツルヲ  
得ス

### 第四節 裁判所ノ管轄ニ付テノ合意

第二十九條 第一審裁判所ハ當然管轄權ヲ有セサルモ當事者  
ノ合意ニ因リ管轄權ヲ有ス但書面ヲ以テ合意ヲ爲シ且其合  
意カ一定ノ權利關係及ヒ其權利關係ヨリ生スル訴訟ニ係ル  
キニ限ル

第三十條 被告カ管轄違ノ申立ヲ爲サスシテ本案ノ口頭辯論  
ヲ爲スキハ亦前條ト同一ノ効力ヲ生ス

第三十一條 左ノ場合ニ於テハ第二十九條及ヒ第三十條ノ規  
定ヲ適用セス



第一 財産權上ノ請求ニ非サル訴訟ニ係ルキ

第二 物上又ハ土地ノ專屬管轄ニ屬スル訴ナルキ

第五節 裁判所職員ノ除外及ヒ忌避

第三十二條 判事ハ左ノ場合ニ於テ法律ニ依リ其職務ノ執行ヨリ除外セラル可シ

第一 判事又ハ其婦カ原告若クハ被告タルキ又ハ訴訟ニ係ル請求ニ付キ當事者ノ一方若クハ雙方ト共同權利者、共同義務者若クハ償還義務者タルノ關係ヲ有スルキ

第二 判事又ハ其婦カ當事者ノ一方若クハ雙方又ハ其配偶者ト親族ナルキ但姻族ニ付テハ婚姻ノ解除シタルキト雖モ亦同シ

第三 判事カ同一ノ事件ニ付キ證人若クハ鑑定人ト爲リテ訊問ヲ受クルキ又ハ訴訟代理人タルノ任ヲ受クルキ

若クハ受ケタルキ又ハ法律上代理人ト爲ルノ權利ヲ有スルキ若クハ之ヲ有シタルキ

第四 判事カ不服ノ申立アル裁判ヲ前審又ハ仲裁ニ於テ爲スニ當リ判事又ハ仲裁人トシテ參與シタルキ但此場合ニ於テ判事ハ受命判事又ハ受託判事トシテハ職務ノ執行ヨリ除外セラル、ト無シ

第三十三條 判事カ法律ニ依リ職務ノ執行ヨリ除外セラル、キ及ヒ偏頗ノ恐アルキハ總テノ場合ニ於テ各當事者ヨリ之ヲ忌避スルヲ得

偏頗ノ忌避ハ判事ノ不公平ナル裁判ヲ爲スヲ疑フニ足ル可キ情况アルキ之ヲ爲スヲ得

第三十四條 判事カ法律ニ依リ職務ノ執行ヨリ除外セラル、場合ニ於ケル判事ノ忌避ハ其訴訟ノ如何ナル程度ニ在ルヲ



問ハス之ヲ爲スヲ得又偏頗ノ恐アル場合ニ於テハ原告若クハ被告其覺知シタル忌避ノ原因ヲ主張セスシテ判事ノ面前ニ於テ申立ヲ爲シ又ハ相手方ノ申立ニ對シ陳述ヲ爲シタル後ハ其判事ヲ忌避スルヲ得ス

第三十五條 忌避ノ申請ハ判事所屬ノ裁判所ニ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スヲ得

忌避ノ原因ハ之ヲ疏明スルヲ要ス忌避セラレタル判事ノ職務上ノ陳述ハ其疏明ノ用ニ充ツルヲ得

原告若クハ被告カ判事ノ面前ニ於テ申立ヲ爲シ又ハ相手方ノ申立ニ對シ陳述ヲ爲シタル後ハ其判事ニ對シ偏頗ノ忌避ヲ爲スルハ忌避ノ原因其後ニ生シ又ハ之ヲ其後ニ覺知シタルヲ得疏明ス可シ

第三十六條 忌避セラレタル判事合議裁判所ニ屬スルキハ其

裁判所忌避ノ申請ヲ裁判ス但忌避セラレタル判事ハ其裁判ニ參與スルヲ得ス

若シ其裁判所右判事ノ退去ニ依リ決定ヲ爲スヲ能ハサルキハ直近上級ノ裁判所其申請ヲ裁判ス

區裁判所判事忌避セラレタルキハ上級ノ地方裁判所其申請ヲ裁判ス若シ區裁判所判事忌避ノ申請ヲ正當ナリトスルキハ裁判ヲ要セス

第三十七條 忌避ノ申請ニ付テノ裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スヲ得忌避セラレタル判事ハ先ツ申請ノ理由ニ付キ職務上意見ヲ述フ可シ

第三十八條 忌避ノ申請ヲ正當ナリト宣言スル決定ニ對シテハ上訴ヲ爲スヲ得ス其申請ヲ不當ナリト宣言スル決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スヲ得



第三十九條 忌避セラレタル判事ハ忌避申請ノ完結スルマテ  
總テノ行爲ヲ避ク可シ然レモ偏頗ノ爲メ忌避セラレタル判  
事ハ猶豫ス可カラサル行爲ヲ爲ス可シ

第四十條 忌避申請ノ管轄裁判所ハ其申請アラサルモ忌避ノ  
原因タル情況ニ付キ判事ヨリ申出アルキ又ハ他ノ事由ヨリシ  
テ判事カ法律ニ依リ除外セラル、ノ疑アルキモ亦裁判ヲ爲ス  
此裁判ハ豫メ當事者ヲ審訊セスシテ之ヲ爲ス又其裁判ハ之  
ヲ當事者ニ送達スルヲ要セス

第四十一條 本節ノ規定ハ裁判所書記ニモ之ヲ適用ス但其裁  
判ハ書記所屬ノ裁判所之ヲ爲ス

第六節 檢事ノ立會

第四十二條 裁判所ハ左ノ訴訟ニ付テハ口頭辯論ノ期日前ニ  
檢事ニ通知ヲ爲シ檢事ハ其口頭辯論ニ立會フヲ要ス

第一 國其他公ノ無形人ニ關スル訴訟

第二 婚姻ニ關スル訴訟

第三 夫婦間ノ財産ニ關スル訴訟

第四 親子若クハ養親子ノ分限其他總テ人ノ分限ニ關ス  
ル訴訟

第五 無能力者ニ關スル訴訟

第六 養料ニ關スル訴訟

第七 失踪者及ヒ相續人虧缺ノ遺産ニ關スル訴訟

第八 證書ノ偽造若クハ變造ノ訴訟

第九 再審

檢事ノ陳述ハ當事者ノ辯論終リタル片之ヲ爲ス  
當事者ハ檢事ノ意見ニ對シ事實ノ更正ノミニ付キ陳述ヲ爲  
スヲ得



第四十三條 前條ニ掲ケタル訴訟ノ外ト雖モ檢事ハ立會フヲ  
ヲ必要トスルキハ其訴訟ノ口頭辯論ニ立會フヲ求メ又裁  
判所ハ職權ヲ以テ檢事ノ立會ヲ求ムルヲ得

第二章 當事者

第一節 訴訟能力

第四十四條 原告若クハ被告カ自ラ訴訟ヲ爲シ又ハ訴訟代理  
人ヲシテ之ヲ爲サシムルノ能力ト法律上代理人ニ依レル訴  
訟無能力者ノ代表ト法律上代理人カ訴訟ヲ爲シ又ハ一ノ訴  
訟行爲ヲ爲スニ付テノ特別授權ノ必要トハ民法ノ規定ニ從  
フ

第四十五條 外國人ハ自國ノ法律ニ從ヒ訴訟能力ヲ有セサル  
モ本邦ノ法律ニ從ヒ訴訟能力ヲ有スルモノナルキハ之ヲ有  
スルモノト看做ス

第四十六條 裁判所ハ訴訟ノ如何ナル程度ニ在ルヲ問ハス職  
權ヲ以テ訴訟能力、法律上代理人タルノ資格及ヒ訴訟ヲ爲ス  
ニ必要ナル授權ニ欠缺ナキヤ否ヲ調査ス可シ  
裁判所ハ遲滯ノ爲メ原告若クハ被告ニ危害アリ且其欠缺ノ  
補正ヲ爲シ得ルモノト認ムルキハ原告若クハ被告又ハ其法  
律上代理人ニ其欠缺ノ補正ヲ爲スノ條件ヲ以テ一時訴訟ヲ  
爲スヲ許スヲ得此場合ニ於テ裁判所ハ欠缺補正ノ爲メ相  
當ノ期間ヲ定メ其期間ノ滿了前ニ判決ヲ爲スヲ得ス但其  
欠缺ノ補正ハ判決ニ接着スル口頭辯論ノ終結マテ之ヲ追完  
スルヲ得

第四十七條 訴訟無能力者又ハ相續人ノ未定ノ遺産又ハ不分  
明ナル相續人ニ對シ訴ヲ起ス可キ場合ニ於テ法律上代理人  
アラサルキハ其事件ノ繫屬ス可キ裁判所ノ裁判長ハ申立ニ



因リ遲滯ノ爲メ危害ノ恐アル場合ニ限リ特別代理人ヲ任ス可シ

右申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スヲ得此裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲シ其裁判ハ申請人ニ之ヲ送達シ又申請ヲ認許シタルキハ其任セラレタル代理人ニモ亦之ヲ送達ス可シ

申請ヲ却下スル裁判ニ對シテハ抗告ヲ爲スヲ得

裁判長ヨリ任セラレタル特別代理人ハ法律上代理人又ハ相續人ノ出頭スルマテ訴訟行爲ニ付キ法律上代理人ノ權利及ヒ義務ヲ有ス

第四十八條 第十五條ニ掲ケタル場合ニ於テ訴訟無能力者カ其現在地又ハ兵營地若クハ軍艦定繫所ノ裁判所ニ訴ヲ受ク可キ場合ニ於テ其法律上代理人他ノ地ニ住スルキハ遲滯ノ

爲メ危害ナシト雖モ前條ノ規定ニ從ヒ特別代理人ヲ任スルヲ得

其他裁判ニ對シ抗告ヲ許ス規定ヲ除クノ外總テ前條ノ規定ヲ適用ス

## 第二節 共同訴訟人

第四十九條 左ノ場合ニ於テハ共同訴訟人トシテ數人カ共ニ訴ヲ爲シ又ハ訴ヲ受クルヲ得

第一 數人カ訴訟物ニ付キ權利共通若クハ義務共通ノ地位ニ立ツキ

第二 同一ナル事實上及ヒ法律上ノ原因ニ基ク請求又ハ義務カ訴訟ノ目的物タルキ

第三 性質ニ於テ同種類ナル事實上及ヒ法律上ノ原因ニ基ク同種類ナル請求又ハ義務カ訴訟ノ目的物タルキ



第五十條 共同訴訟人ハ其資格ニ於テハ各別ニ相手方ニ對立シ其一人ノ訴訟行爲及ヒ懈怠又ハ相手方ヨリ其一人ニ對スル訴訟行爲及ヒ懈怠ハ他ノ共同訴訟人ニ利害ヲ及ボサス

第五十一條 然レモ總テノ共同訴訟人ニ對シ訴訟ニ係ル權利關係カ合一ニノミ確定ス可キキニ限リ左ノ規定ヲ適用ス

共同訴訟人中ノ或ル人ノ攻撃及ヒ防禦ノ方法(證據方法ヲ包含ス)ハ他ノ共同訴訟人ノ利益ニ於テ効ヲ生ス

共同訴訟人中ノ或ル人カ争ヒ又ハ認諾セサルキト雖モ總テノ共同訴訟人カ悉ク争ヒ又ハ認諾セサルモノト看做ス

共同訴訟人中ノ或ル人ノミカ期日又ハ期間ヲ懈怠シタルキハ其懈怠シタル者ハ懈怠セサル者ニ代理ヲ任シタルモノト看做ス

然レモ懈怠シタル共同訴訟人ニハ其懈怠セサリシ場合ニ於

テ爲ス可キ總テノ送達及ヒ呼出ヲ爲スヲ要ス其懈怠シタル共同訴訟人ハ何時タリモ其後ノ訴訟手續ニ再ヒ加ハルヲ得

### 第三節 第三者ノ訴訟參加

第五十二條 他人ノ間ニ權利拘束ト爲リタル訴訟ノ目的物ノ全部又ハ一分ヲ自己ノ爲メニ請求スル第三者ハ本訴訟ノ權利拘束ノ終ニ至ルマテ其訴訟カ第一審ニ於テ繫屬シタル裁判所ニ當事者雙方ニ對スル訴(主參加)ヲ爲シテ其請求ヲ伸張スルヲ得

第三者カ原告及ヒ被告ノ共謀ニ因リ自己ノ債權ニ損害ヲ生スルヲ主張スルキ亦同シ

第五十三條 本訴訟ハ第一審ニ繫屬スルト上級審ニ繫屬スルトヲ問ハス原告被告若クハ參加原告ノ申立ニ因リ又ハ職權



ヲ以テ主參加ニ付テノ權利拘束ノ終ニ至ルマテ之ヲ中止スルヲ得

中止ノ申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ本訴訟ノ繫屬スル裁判所ニ之ヲ爲ス可キヲ得

決定ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲ス可キヲ得

中止ヲ命スル決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲ス可キヲ得

第五十四條 他人ノ間ニ權利拘束ト爲リタル訴訟ニ於テ其一方ノ勝訴ニ依リ權利上利害ノ關係ヲ有スル者ハ訴訟ノ如何ナル程度ニ在ルヲ問ハス權利拘束ノ繼續スル間ハ其一方ヲ補助スル爲メ之ニ附隨スルヲ得

第五十五條 從參加人ハ其附隨スル時ニ於ケル訴訟ノ程度ヲ妨ケサル限りハ其主タル原告若クハ被告ノ爲メニ攻撃及ヒ防禦ノ方法ヲ施用シ且總テノ訴訟行爲ヲ有効ニ行ヒ殊ニ主

タル原告若クハ被告ノ爲メニ存スル期間内ニ故障支拂命令ニ對スル異議又ハ上訴ヲ爲スノ權利ヲ有ス

從參加人ノ陳述及ヒ行爲ト主タル原告若クハ被告ノ陳述及ヒ行爲ト相抵觸スル場合ニ於テハ主タル原告若クハ被告ノ陳述及ヒ行爲ヲ以テ標準トス但民法ニ於テ此ニ異ナル規定アルキハ此限ニ在ラス

第五十六條 從參加人ハ訴訟ヨリ脫退シタルキト雖モ其補助シタル原告若クハ被告トノ關係ニ於テハ其訴訟ノ確定裁判ヲ不當ナリト主張スルヲ得ス

從參加人ハ其附隨ノ時ノ訴訟ノ程度ニ因リ又ハ主タル原告若クハ被告ノ所爲ニ因リ攻撃及ヒ防禦ノ方法ヲ施用スルヲ妨ケラル、キ又ハ主タル原告若クハ被告カ從參加人ノ當時知ラサリシ攻撃及ヒ防禦ノ方法ヲ故意又ハ重過失ニ因リ



施用セザリシキニ限り其補助シタル原告若クハ被告カ訴訟ヲ不十分ニ爲シタリト主張スルヲ得

第五十七條 從參加ハ本訴訟ノ繫屬スル裁判所ニ申請ヲ以テ之ヲ爲ス可シ

申請ニハ當事者及ヒ訴訟ヲ表示シ又一定ノ利害關係(第五十三條)及ヒ附隨セントスル陳述ヲ開示ス可シ

申請ハ當事者ニ之ヲ送達ス可シ  
從參加ハ故障異議又ハ上訴ト併合シテ之ヲ爲スヲ得

第五十八條 原告若クハ被告從參加ニ付キ異議ヲ述フルキハ當事者及ヒ參加人ヲ審訊シタル後決定ヲ以テ參加ノ許否ヲ裁判ス其裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スヲ得  
利害關係ノ存否ニ付キ爭アルキハ參加人其關係ヲ疏明スルノミヲ以テ參加ヲ許スニ足ル

右ノ決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スヲ得

參加ヲ許サ、ル裁判確定セサル間ハ參加人ヲ本訴訟ニ參加セシメ殊ニ總テノ期日ニ之ヲ呼出シ又本訴訟ニ關係アル裁判ヲ爲シタルキハ參加人ニ其裁判ヲ送達ス可シ

第五十九條 參加人ハ當事者雙方ノ承諾ヲ得テ其附隨シタル原告若クハ被告ニ代リ訴訟ヲ擔任スルヲ得此場合ニ於テハ其原告若クハ被告ノ申立ニ因リ判決ヲ以テ訴訟ヨリ之ヲ脱退セシム可シ

第六十條 原告若クハ被告其敗訴ノ場合ニ於テ第三者ニ對シ擔保又ハ賠償ノ請求ヲ爲シ得ヘシト信スルキ又ハ第三者ヨリ請求ヲ受ク可キヲ恐ル、キハ訴訟ノ權利拘束間第三者ニ訴訟ヲ告知スルヲ得

訴訟ノ告知ヲ受ケタル者ハ更ニ訴訟ヲ告知スルヲ得



第六十一條 訴訟告知ハ訴訟ノ繫屬スル裁判所ニ其訴訟告知ノ理由及ヒ訴訟ノ程度ヲ記載シタル書面ヲ提出シテ之ヲ爲ス可シ

其書面ハ第三者ニ送達スルヲ要ス又訴訟ヲ告知スル原告若クハ被告ノ相手方ニハ其謄本ヲ送付ス可シ

第六十二條 訴訟ハ訴訟告知ニ拘ハラヌ之ヲ續行ス

第三者参加ス可キヲ陳述スルキハ從參加ノ規定ヲ適用ス

第六十三條 第三者ノ名ヲ以テ物品ヲ占有スルヲ主張スル

者其物品ノ占有者トシテ被告ト爲リタルキハ本案ノ辯論前

第三者ヲ指名シ之ニ陳述ヲ爲サシムル爲メ其呼出ヲ求ムル

キハ第三者ノ陳述ヲ爲シ又ハ之ヲ爲ス可キ期日マテ本案ノ

辯論ヲ拒ムヲ得

第三者カ被告ノ主張ヲ争フキ又ハ陳述ヲ爲サ、ルキハ被告

ハ原告ノ申立ニ應スルヲ得

第三者カ被告ノ主張ヲ正當ト認ムルキハ被告ノ承諾ヲ得テ

之ニ代リ訴訟ヲ引受クルヲ得原告ノ承諾ハ被告カ第三者

ノ名ヲ以テ占有スルヲ關セサル請求ニ限り之ヲ必要トス

第三者カ訴訟ヲ引受ケタルキハ裁判所ハ被告ノ申立ニ因リ

之ヲ訴訟ヨリ脱退セシム可シ其物品ニ付テノ裁判ハ被告ニ

對シテモ効力ヲ有シ且之ヲ執行スルヲ得

第四節 訴訟代理人及ヒ輔佐人

第六十四條 原告若クハ被告ハ自ラ訴訟ヲ爲シ又ハ辯護士ヲ

以テ訴訟代理人トシ之ヲ爲ス

辯護士ノ在ラサル場合ニ於テハ訴訟能力者タル親族若クハ

雇人ヲ以テ訴訟代理人ト爲シ若シ此等ノ者ノ在ラサルキハ

他ノ訴訟能力者ヲ以テ訴訟代理人ト爲スヲ得



區裁判所ニ於テハ辯護士ノ在ルキト雖モ訴訟能力者タル親族若クハ雇人ヲ以テ訴訟代理人ト爲スヲ得

第六十五條 訴訟委任ハ裁判所ノ記録ニ備フ可キ書面委任ヲ以テ之ヲ證ス可シ

私署證書ハ相手方ノ求ニ因リ之ヲ認證ス可シ其認證ハ公證人之ヲ爲シ又相當官吏之ヲ爲スヲ得

口頭辯論ノ期日又ハ受命判事若クハ受託判事ノ面前ニ於テ口頭委任ヲ爲シ其陳述ヲ調書ニ記載セシムルキハ書面委任ト同一ナリトス

第六十六條 訴訟委任ハ反訴、主參加、故障、假差押若クハ假處分又ハ強制執行ニ因リ生スル訴訟行爲ヲ併セ訴訟ニ關スル總テノ訴訟行爲ヲ爲シ及ヒ相手方ヨリ辨濟スル費用ノ領收ヲ爲スノ權ヲ授與ス

訴訟代理人ハ特別ノ委任ヲ受クルニ非サレハ控訴若クハ上告ヲ爲シ、再審ヲ求メ、代人ヲ任シ、和解ヲ爲シ訴訟物ヲ拋棄シ又ハ相手方ヨリ主張シタル請求ヲ認諾スルノ權ヲ有セス

第六十七條 訴訟委任ハ法律上ノ範圍(第六十六條第一項)ヲ制限スルモ相手方ニ對シ其効力ナシ

然レモ辯護士ニ依レル代理ヲ除クノ外ハ各箇ノ訴訟行爲ニ付キ委任ヲ爲スヲ得

第六十八條 訴訟代理人數人アルキハ共同若クハ各別ニテ原告若クハ被告ヲ代理スルヲ得但委任ニ此ト異ナル定アルモ相手方ニ對シ其効力ナシ

第六十九條 訴訟代理人カ委任ノ範圍内ニ於テ爲シタル訴訟上ノ行爲及ヒ不行爲ハ原告若クハ被告ニ對シテハ其本人ノ行爲又ハ不行爲ト同一ナリトス



然レモ代理人ノ事實上ノ陳述ハ其代理人ト共ニ裁判所ニ出頭シタル原告若クハ被告ヨリ即時ニ之ヲ取消シ又ハ更正シタルキニ限り其効力ヲ失フ

第七十條 委任者ノ死亡其訴訟能力若クハ法律上代理ノ變更

委任ノ廢罷及ヒ代理ノ謝絶ニ因ル委任ノ消滅ハ其消滅ヲ通知スルマテ相手方ニ對シ其効力ナシ

其通知書ハ原告若クハ被告ヨリ受訴裁判所ニ之ヲ差出シ裁判所ハ相手方ニ之ヲ送達ス可シ

代理人ハ謝絶ヲ爲スモ委任者他ノ方法ヲ以テ自己ノ權利ノ防衛ヲ爲サ、ル間ハ其委任者ノ爲メニ行爲ヲ爲スヲ得

第七十一條 委任ノ欠缺ハ原告若クハ被告ノ爲メ其代理人ナキモノト看做ス

裁判所ハ職權ヲ以テ委任ノ欠缺ヲ調査シ委任ナク又ハ適式

ノ委任ナク代理人トシテ出頭スル者ニ情況ニ從ヒ費用及ヒ損害ノ保證ヲ立テシメ又ハ之ヲ立テシメスシテ假ニ訴訟ヲ爲スヲ許スヲ得

判決ハ欠缺ヲ補正シ又ハ之ヲ補正スル爲メ裁判所ノ適宜ニ定ムル期間ノ滿了後ニ限り之ヲ爲スヲ得但欠缺ノ補正ハ

第七十二條 原告若クハ被告ハ辯護士ヲ輔佐人トシ又ハ何時

ニテモ裁判所ノ取消シ得ヘキ許可ヲ得テ他ノ訴訟能力者ヲ輔佐人トシテ共ニ出頭スルヲ得其輔佐人ハ口頭辯論ニ於

テ權利ヲ伸張シ又ハ防禦スル爲メ原告若クハ被告ヲ補助スルモノトス

輔佐人ノ演述ハ原告若クハ被告即時ニ之ヲ取消シ又ハ更正セサルキニ限り原告若クハ被告自ラ演述シタルモノト看做



ス

第五節 訴訟費用

第七十三條 敗訴ノ原告若クハ被告ハ訴訟ノ費用ヲ負擔シ殊ニ訴訟ニ因リ生シタル費用ヲ相手方ニ辨濟ス可シ但其費用ハ裁判所ノ意見ニ於テ相當ナル權利伸張又ハ權利防禦ニ必要ナリト認ムルモノニ限ル

訴訟中ニ訴ヲ取下ケ、請求ヲ拋棄シ又ハ相手方ノ請求ヲ認諾スル原告若クハ被告ハ敗訴ノ原告若クハ被告ニ同シ

第七十四條 當事者ノ各方一分ハ勝訴ト爲リ一分ハ敗訴ト爲ルキハ其費用ヲ相消シ又ハ割合ヲ以テ之ヲ分擔ス可シ第一ノ場合ニ於テハ各當事者ハ其支出シタル費用ヲ自ラ負擔シ他ノ一方ニ對シ辨濟ヲ請求スルヲ得ス然レモ裁判所ハ相手方ノ要求格外ニ過分ナルニ非ス且別段

ノ費用ヲ生セサリシキ又ハ判事ノ意見鑑定人ノ鑑定若クハ相互ノ計算ニ因リ要求額ヲ定ムルニ非サレハ容易ニ過分ノ要求ヲ避クルヲ得サリシキハ當事者ノ一方ニ訴訟費用ノ全部ヲ負擔セシムルヲ得

第七十五條 被告直チニ請求ヲ認諾シ且其作爲ニ因リ訴ヲ起スニ至ラシメタルニ非サルキハ訴訟費用ハ原告ノ勝訴ト爲リタルニ拘ハラス其負擔ニ歸ス

第七十六條 期日若クハ期間ヲ懈怠シ又ハ自己ノ過失ニ因リ期日ノ變更、辯論ノ延期、辯論續行ノ爲メニスル期日ノ指定、期間ノ延長其他訴訟ノ遲滞ヲ生セシメタル原告若クハ被告ハ本案ノ勝訴者ト爲リタルニ拘ハラス此カ爲メニ生シタル費用ヲ負擔ス可シ

第七十七條 裁判所ハ無益ナル攻撃又ハ防禦ノ方法(證據方法



ヲ包含ス)ヲ主張シタル原告若クハ被告ヲシテ本案ノ勝訴者ト爲リタルニ拘ハラズ其方法ノ費用ヲ負擔セシムルヲ得

第七十八條 無益ナル上訴又ハ取下ケタル上訴ノ費用ハ之ヲ提出シタル原告若クハ被告ノ負擔ニ歸ス

第七十九條 上訴ニ因リ裁判ノ全部又ハ一分ヲ廢棄若クハ破毀スルキハ訴訟ノ總費用(上訴ノ費用ヲ包含ス)ノ裁判ハ本案ノ終局裁判ト併合シテ更ニ之ヲ爲ス可シ

原告若クハ被告カ前審ニ於テ主張スルヲ得ヘカリシ事實又ハ攻撃若クハ防禦ノ方法ヲ新ニ提出スルニ因リ勝訴者ト爲ルキハ其原告若クハ被告ニ上訴費用ノ全部又ハ一分ヲ負擔セシムルヲ得

第八十條 當事者カ訴訟物ニ付キ和解ヲ爲スキハ其訴訟ノ費用ハ和解ノ費用ト共ニ相消シタルモノト看做ス但當事者別

段ノ合意ヲ爲シタルキハ此限ニ在ラス

第八十一條 民法ノ規定ニ從ヒ費用ニ付キ共同訴訟人ノ連帶義務ノ生セサルキニ限り其共同訴訟人ハ相手方ニ對シ平等ニ費用ヲ負擔ス然レモ共同訴訟人ノ訴訟ニ於ケル利害ノ關係著シク相異ナルキハ裁判所ハ其利害關係ノ割合ニ從ヒ費用ヲ負擔セシムルヲ得

共同訴訟人中ノ或ル人カ特別ノ攻撃又ハ防禦ノ方法ヲ主張シタルキハ他ノ共同訴訟人ハ此カ爲メニ生シタル費用ヲ負擔セス

第八十二條 從參加ニ對シ原告若クハ被告カ異議ヲ述フルキハ其異議ノ決定ニ於テ從參加人ト其原告若クハ被告トノ中間訴訟ノ費用ニ付キ第七十三條乃至第七十九條ノ規定ニ從ヒ裁判ヲ爲ス可シ



參加ヲ許シタルキ又ハ異議ヲ述ヘサルキハ本訴訟ノ判決ニ於テ從參加人ト相手方ナル主タル原告若クハ被告トノ間ニ從參加ニ因リ生シタル費用ニ付テモ亦前數條ノ規定ニ從ヒ裁判ヲ爲ス可シ

第八十三條 費用ノ點ニ限リタル裁判ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス其他ノ裁判ニ對シテハ本案ノ裁判ニ對シ許ス可キ上訴ヲ提出シ且追行スルキニ限リ費用ノ點ニ付キ不服ヲ申立ツルコトヲ得

費用ノ點ニ限リタルキト雖モ相手方ヨリ提出シタル上訴ニ附帶スル場合ニ於テハ不服ヲ申立ツルコトヲ得

第八十四條 裁判所書記、法律上代理人、辯護士其他ノ代理人及ヒ執達吏ノ過失又ハ懈怠ニ因リ費用ノ生シタルキハ受訴裁判所ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其費用ノ辨濟ヲ負擔セシ

ムルノ決定ヲ爲スコトヲ得但其決定前當事者ニ口頭又ハ書面ニテ陳辯ヲ爲スノ機會ヲ與フ可シ

此裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得其決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第八十五條 辨濟ス可キ費用額ノ確定ハ申請ニ因リ訴訟ノ第一審ニ繫屬シタル裁判所ノ決定ヲ以テ之ヲ爲ス  
申請ハ第七十三條第二項又ハ上訴取下ノ場合ヲ除クノ外執行シ得ヘキ裁判ニ依ルキニ限リ之ヲ爲スコトヲ得  
申請ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

申請ニハ費用計算書、相手方ニ付與ス可キ計算書ノ謄本及ヒ各箇費用額ノ疏明ニ必要ナル證書ヲ添附ス可シ

第八十六條 費用額確定ノ裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得



裁判所ハ裁判所書記ニ費用計算書ノ計算上ノ検査ヲ命スル  
ヲ得

裁判所ハ費用額確定ノ決定ヲ爲ス前相手方ニ計算書ヲ付與  
シテ裁判所ノ定ムル期間内ニ陳述ヲ爲ス可キ旨ヲ之ニ催告  
スルヲ得此決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スヲ得

第八十七條 當事者ハ訴訟費用ノ全部又ハ一分ヲ割合ニ從ヒ  
分擔ス可キハ裁判所ハ費用額確定ノ決定ヲ爲ス前相手方  
ニ裁判所ノ定ムル期間内ニ其費用ノ計算書ヲ差出ス可キ旨  
ヲ催告ス可シ此期間ヲ徒過シタル後ハ費用額確定ノ決定ハ  
相手方ノ費用ヲ顧ミス之ヲ爲ス可シ但相手方ハ後ニ自己ノ  
費用ヲ以テ其費用額確定ノ申請ヲ爲スノ妨ト爲ルヲ無シ

第六節 保證

第八十八條 訴訟上ノ保證ハ當事者カ別段ノ合意ヲ爲ス場合

又ハ此法律ニ於テ保證ヲ定ムルヲ裁判所ノ自由ナル意見  
ニ任スル場合ヲ除クノ外裁判所ノ意見ニ於テ擔保ニ十分ナ  
リトスル現金又ハ有價證券ヲ供託シテ之ヲ爲ス

第八十九條 原告又ハ原告ノ從參加人タル外國人ハ被告ニ對  
シ其求ニ因リ訴訟費用ニ付キ保證ヲ立ツ可シ

左ノ場合ニ於テハ保證ヲ立ツルノ義務ヲ生セス

第一 國際條約又ハ原告ノ屬スル國ノ法律ニ依リ本邦人  
カ同一ノ場合ニ於テ保證ヲ立ツルノ義務ナキキ

第二 反訴ノ場合

第三 證書訴訟及ヒ爲替訴訟ノ場合

第四 公示催告ニ基キ起シタル訴ノ場合

第九十條 裁判所ハ保證ヲ立ツ可キ數額及ヒ期間ヲ確定ス可  
シ



其數額ヲ確定スルニハ被告ノ訴ヲ受ケタルカ爲メ各審級ニ於テ支出ス可キ訴訟費用ノ額ヲ標準ト爲ス可シ  
訴訟中ニ保證ノ不足ヲ生シ且追増保證ヲ立ツ可キコト被告カ求ムルキハ前項ト同一ノ手續ニ依ル可シ但爭ナキ請求ノ部分カ擔保ニ十分ナルキハ此限ニ在ラス

第九十一條 確定ノ期間後裁判アルマテニ保證ヲ立テサル場合ニ於テハ被告ノ申立ニ因リ判決ヲ以テ訴ヲ取下ケタリト宣言シ又原告カ上訴ヲ爲シタルキハ其上訴ヲ取下ケタリト宣言ス可シ

#### 第七節 訴訟上ノ救助

第九十二條 何人ヲ問ハス自己及ヒ其家族ノ必要ナル生活ヲ害スルニ非サレハ訴訟費用ヲ出ダスコト能ハサル者ハ訴訟上ノ救助ヲ請求スルコトヲ得但其目的トスル權利ノ伸張又ハ防

禦ノ輕忽ナラス又ハ見込ナキニ非スト見ユルキニ限ル

第九十三條 外國人ハ其屬スル國ノ法律又ハ國際條約ニ依リ本邦人カ同一ノ場合ニ於テ訴訟上ノ救助ヲ請求スルコトヲ得ルキニ限り之ヲ請求スルコトヲ得

第九十四條 訴訟上救助ノ申請ハ訴訟ノ關係ヲ表明シ且證據方法ヲ開示シテ其救助ヲ求ムル審級ノ裁判所ニ之ヲ提出ス可シ其申請ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

原告若クハ被告ハ申請ノ提出ト共ニ管轄市町村長ヨリ發シタル證書ヲ出ダスコトヲ要ス其證書ニハ原告若クハ被告ノ身分、職業、財産並ニ家族ノ實況及ヒ其納ム可キ直税ノ額ヲ開示シテ、訴訟費用支拂ノ無資力ヲ證ス可シ

第九十五條 訴訟上ノ救助ハ各審ニ於テ各別ニ之ヲ付與ス第一審ニ於テハ強制執行ヲ併セテ之ヲ付與スルモノトス



前審ニ於テ訴訟上ノ救助ヲ受ケタルルキハ上級審ニ於テハ無  
資力ヲ證スルコトヲ要セス相手方上訴ヲ提出シタルルキハ上級  
審ニ於テハ訴訟上ノ救助ヲ求ムル原告若クハ被告ノ權利ノ  
伸張又ハ防禦ノ輕忽ナラス又ハ見込ナキニ非スト見ユルヤ  
ヲ調査スルコトヲ要セス

第九十六條 訴訟上ノ救助ハ之ヲ受ケタル條件ノ一カ存セザ  
リシキ又ハ消滅シタルルキハ何時タリモ之ヲ取消スコトヲ得

第九十七條 訴訟上ノ救助ハ之ヲ受ケタル原告若クハ被告ノ  
死亡ト共ニ消滅ス

第九十八條 訴訟上ノ救助ハ之ヲ受ケタル原告若クハ被告ノ  
爲メニ左ノ効力ヲ生ス

第一 裁判費用(國庫ノ立替金ヲ包含ス)ヲ濟清スルコトノ假  
免除

第二 訴訟費用ノ保證ヲ立ツルコトノ免除

第三 送達及ヒ執行行爲ヲ爲サシムル爲メ一時無報酬ニ  
テ執達吏ノ附添ヲ求ムルノ權利

受訴裁判所ハ必要ナル場合ニ於テハ訴訟上ノ救助ヲ受ケタ  
ル原告若クハ被告ノ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ一時無報酬  
ニテ辯護士ノ附添ヲ命スルコトヲ得

第九十九條 訴訟上ノ救助ハ相手方ニ生シタル費用ヲ辨濟ス  
ル義務ニ影響ヲ及ホサス

第一百條 救助ヲ受ケタル原告若クハ被告ノ爲メ假ニ濟清ヲ免  
除シタル裁判費用ハ未納裁判費用ノ取立ニ關スル規定ニ準  
シ訴訟費用ニ付キ確定裁判ヲ受ケタル相手方又ハ訴若クハ  
上訴ノ取下、拋棄、認諾若クハ和解ニ因リ訴訟費用ヲ負擔ス可  
キ相手方ヨリ之ヲ取立ツルコトヲ得



救助ヲ受ケタル原告若クハ被告ニ附添ヒタル執達吏又ハ辯護士ハ同一ノ條件アルキハ亦自己ノ權利ニ依リ費用確定ノ方法ヲ以テ其手数料及ヒ立替金ヲ取立ツルヲ得

第一百一條 救助ヲ受ケタル原告若クハ被告ハ自己及ヒ其家族

ノ必要ナル生活ヲ害セスシテ費用ノ濟清ヲ爲シ得ルニ至ル

キハ假免除ヲ得タル數額(第九十八條第一號)ヲ直チニ追拂ヒ

スルノ義務アリトス

第一百二條 裁判所ハ檢事ノ意見ヲ聽キタル後訴訟上救助ノ付

與并ニ辯護士附添ノ命令ニ付テノ申請、訴訟上救助ノ取消及

ヒ數額追拂ノ義務ニ付キ決定ヲ爲ス

此裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スヲ得

第一百三條 訴訟上ノ救助ヲ付與シ又ハ其取消ヲ拒ミ若クハ費

用追拂ヲ命スルヲ拒ム決定ニ對シテハ檢事ニ限り抗告ヲ

爲スヲ得

辯護士ノ附添ヲ命スル決定ニ對シテハ上訴ヲ爲スヲ得

訴訟上ノ救助ヲ拒ミ若クハ取消シ又ハ辯護士ノ附添ヲ拒ミ

又ハ費用ノ追拂ヲ命スル決定ニ對シテハ原告若クハ被告ハ

抗告ヲ爲スヲ得

### 第三章 訴訟手續

第一節 口頭辯論及ヒ準備書面

第一百四條 判決裁判所ニ於ケル訴訟ニ付テノ當事者ノ辯論ハ

口頭ナリトス但此法律ニ於テ口頭辯論ヲ經スシテ裁判ヲ爲

スヲ定メタルキハ此限ニ在ラス

第一百五條 口頭辯論ハ書面ヲ以テ之ヲ準備ス

第一百六條 準備書面ニハ左ノ諸件ヲ具備ス可シ

第一 當事者及ヒ其法律上代理人ノ氏名、身分、職業、住所、裁



判所、訴訟物及ヒ附屬書類

- 第二 原告若クハ被告カ法廷ニ於テ爲サント欲スル申立
  - 第三 申立ノ原因タル事實上ノ關係
  - 第四 相手方ノ事實上ノ主張ニ對スル陳述
  - 第五 原告若クハ被告カ事實上主張ノ證明又ハ攻撃ノ爲メ用ヰントスル證據方法及ヒ相手方ノ申出テタル證據方法ニ對スル陳述
  - 第六 原告若クハ被告又ハ其訴訟代理人ノ署名及ヒ捺印
  - 第七 場所、年、月、日
- 第一百七條 準備書面ニ於テ提出ス可キ事實ハ簡明ニ記載ス可シ
- 其他事實上ノ關係ノ説明並ニ法律上ノ討論ハ書面ニ之ヲ掲クルヲ得ス

- 第一百八條 準備書面ニハ訴訟資格ニ付テノ證書ノ原本、正本又ハ謄本其他總テ原告若クハ被告ノ手中ニ存スル證書ニシテ書面中ニ申立ノ原因トシテ引用シタルモノ、謄本ヲ添附ス可シ
- 證書ノ一部分ノミヲ要用トスルキハ其冒頭、事件ニ屬スル部分、終尾、日附、署名及ヒ印章ヲ謄寫シタル抄本ヲ添附スルヲ以テ足ル
- 證書カ既ニ相手方ニ知レタルキ又ハ大部ナルキハ其證書ヲ表示シ且相手方ニ之ヲ閱覽セシメント欲スル旨ヲ附記スルヲ以テ足ル
- 第一百九條 當事者ハ準備書面及ヒ其附屬書類並ニ相手方ニ付與スル爲メ必要ナル謄本ヲ裁判所書記課ニ差出ス可シ
- 若シ相手方ニ付與スル爲メ必要ナル謄本ヲ差出サ、ルキハ



裁判所書記ハ其懈怠者ノ費用ヲ以テ之ヲ作ラシム可シ  
第一百十條 裁判長ハ口頭辯論ヲ開キ且之ヲ指揮ス

裁判長ハ發言ヲ許シ又其命ニ從ハサル者ニ發言ヲ禁スルヲ得

裁判長ハ事件ニ付キ十分ナル説明ヲ爲サシメ且間斷ナク辯論ノ終了スルヲ注意ス又必要ナル場合ニ於テハ直ニ辯論續行ノ期日ヲ定ム

裁判所ニ於テ事件ニ付キ十分ナル説明ヲ爲セリト認ムルキハ裁判長ハ口頭辯論ヲ閉チ及ヒ裁判所ノ判決並ニ決定ヲ言渡ス

第一百十一條 口頭辯論ハ當事者ノ申立ヲ爲スニ因テ始マル當事者ノ演述ハ事實上及ヒ法律上ノ點ニ於ケル訴訟關係ヲ包括ス可シ

口頭演述ニ換ヘテ書類ヲ援用スルヲ許サス文字上ノ旨趣ヲ要用トスル書類又ハ其一部分ニ限り之ヲ朗讀スルヲ得  
第一百十二條 各當事者ハ相手方ノ主張シタル事實ニ對シ陳述ヲ爲ス可シ

明カニ爭ハサル事實ハ原告若クハ被告ノ他ノ陳述ヨリ之ヲ爭ハントスルノ意思カ顯レサルキハ自白シタルモノト看做ス  
不知ノ陳述ハ原告若クハ被告ノ自己ノ行爲ニ非ス又自己ノ實驗シタモノニモ非サル事實ニ限り之ヲ許ス此場合ニ於テ不知ヲ以テ答ヘタル事實ハ爭ヒタルモノト看做ス

第一百十三條 裁判長ハ職權上調査ス可キノ點ニ關シ相手方ヨリ起サ、ル疑ノ存スルキハ其疑ニ付キ注意ヲ爲スヲ得  
裁判長ハ問ヲ發シテ不明瞭ナル申立ヲ釋明シ主張シタル事



實ノ不十分ナル證明ヲ補充シ證據方法ヲ申出テ其他事件ノ關係ヲ定ムルニ必要ナル陳述ヲ爲サシム可シ  
陪席判事ハ裁判長ニ告ケテ問ヲ發スルヲ得  
當事者ハ相手方ニ對シ自ラ問ヲ發スルヲ得然レモ其間  
ヲ發ス可キ旨ヲ裁判長ニ求ムルヲ得  
若シ其間ニ對シテ答ヘス又ハ判然答ヘサルキハ相手方ノ利益ト爲ル可キ答ヲ爲シタルモノト看做スヲ得  
第一百十四條 事件ノ指揮ニ關スル裁判長ノ命又ハ裁判長若クハ陪席判事ノ發シタル問ニ對シ辯論ニ參カル者ヨリ不適法ナリトシテ異議ヲ述ヘタルキハ裁判所ハ其異議ニ付キ直ニ裁判ヲ爲ス  
第一百十五條 裁判所ハ事件ノ關係ヲ明瞭ナラシムル爲メ原告若クハ被告ノ自身出頭ヲ命スルヲ得

第一百十六條 裁判所ハ原告若クハ被告ノ援用シタル證書ニシテ其手中ニ存スルモノヲ提出ス可キヲ命スルヲ得  
裁判所ハ外國語ヲ以テ作りタル證書ニ付テハ其譯書ヲ添付ス可キヲ命スルヲ得  
第一百十七條 裁判所ハ當事者ノ所持スル訴訟記錄ニシテ事件ノ辯論及ヒ裁判ニ關スルモノヲ提出ス可キヲ命スルヲ得  
第一百十八條 裁判所ハ檢證及ヒ鑑定ヲ命スルヲ得  
其手續ハ申立ニ因リ命スル檢證及ヒ鑑定ニ付テノ規定ニ從フ  
第一百十九條 裁判所ハ一箇ノ訴ニ於テ爲シタル數箇ノ請求又ハ本訴及ヒ反訴ニ付テノ辯論ヲ分離シテ爲ス可キヲ命スルヲ得  
第一百二十條 同一ノ請求ニ關シ數箇ノ獨立ナル攻撃及ヒ防禦



ノ方法ヲ提出シタルキハ裁判所ハ先ツ辯論ヲ其一二ニ制限  
ス可キヲ命スルヲ得

第二百一十一條 裁判所ハ同一ノ人又ハ別異ノ人ノ數箇ノ訴訟  
ニシテ其裁判所ニ繫屬スルモノヲ併合ス可キヲ命スルヲ得  
得但其訴訟ノ目的物タル請求ヲ元來一箇ノ訴ニ於テ主張シ  
得ヘキニ限ル

第二百十二條 裁判所ハ訴訟ノ全部又ハ一分ノ裁判カ他ノ繫  
屬スル訴訟ニ於テ定マル可キ權利關係ノ成立又ハ不成立ニ  
繫ルキハ他ノ訴訟ノ完結ニ至ルマテ辯論ヲ中止ス可キヲ命  
スルヲ得

第二百十三條 裁判所ハ民事訴訟中罰ス可キ行爲ノ嫌疑生ス  
ルキハ刑事訴訟手續ノ完結ニ至ルマテ辯論ヲ中止ス可シ但  
其罰ス可キ行爲カ訴訟ノ裁判ニ影響ヲ及ホスキニ限ル

第二百十四條 裁判所ハ前條ノ場合ヲ除クノ外分離併合又ハ  
中止ニ關シ發シタル命ヲ取消スルヲ得

第二百五條 裁判所ハ閉ケタル辯論ノ再開ヲ命スルヲ得  
第二百十六條 裁判所ハ辯論ニ參カル者日本語ニ通セサルキ  
ハ通事ヲ立會ハシム但帝國裁判所構成法第二百十五條ノ場  
合ハ此限ニ在ラス

第二百十七條 裁判所ハ辯論ニ參カル者聾又ハ啞ナルキ之ニ  
文字ヲ以テ理會セシムルヲ得サル場合ニ限り通事ヲ立會  
ハシムルヲ得

第二百十八條 裁判所ハ相當ノ演述ヲ爲ス能力ノ缺ケタル原  
告若クハ被告又ハ訴訟代理人若クハ輔佐人ニ其後ノ演述ヲ  
禁シ且新期日ヲ定メ辯護士ヲシテ演述セシム可キヲ命ス  
可シ



裁判所ハ裁判所ニ於テ辯論ヲ業トスル訴訟代理人若クハ輔佐人ヲ退斥セシムルコトヲ得此場合ニ於テハ新期日ヲ定メ且退斥ノ決定ヲ原告若クハ被告ニ送達ス可シ  
本條ノ規定ニ從ヒ爲シタル命ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

辯護士ニハ本條ノ規定ヲ適用セス

第二百二十九條 辯論ニ參カル者秩序維持ノ爲メ辯論ノ場所ヨリ退斥セラレタルキハ申立ニ因リ本人ノ任意ニ退去シタルト同一ノ方法ヲ以テ之ヲ取扱フコトヲ得但帝國裁判所構成法  
第一百十七條ニ依リ中止シタル場合ハ此限ニ在ラス  
前條ノ場合ニ於テ禁止又ハ退斥ノ命ヲ受ケタル者再ヒ出頭スルキハ前項ノ方法ヲ以テ之ヲ取扱フコトヲ得

第三百十條 口頭辯論ニ付テハ調書ヲ作ル可シ

調書ニハ左ノ諸件ヲ具備ス可シ

第一 辯論ノ場所、年、月、日

第二 判事、裁判所書記及ヒ立會ヒタル檢事若クハ通事ノ氏名

第三 訴訟物及ヒ當事者ノ氏名

第四 出頭シタル當事者、法律上代理人、訴訟代理人及ヒ輔佐人ノ氏名若シ原告若クハ被告闕席シタルキハ其闕席シタルコト

第五 公ニ辯論ヲ爲シ又ハ公開ヲ禁シタルコト

第三百十一條 辯論ノ進行ニ付テハ其要領ノミヲ調書ニ記載ス可シ

調書ニ記載シテ明確ニス可キ諸件ハ左ノ如シ

第一 自白、認諾、拋棄及ヒ和解



第二 明確ニス可キ規定アル申立及ヒ陳述

第三 證人及ヒ鑑定人ノ供述但其供述ハ以前聽カサルモ  
ノナルキ又ハ以前ノ供述ニ異ナルキニ限ル

第四 檢證ノ結果

第五 書面ニ作り調書ニ添附セサル裁判(判決、決定及ヒ命

令)

第六 裁判ノ言渡

附録トシテ調書ニ添附シ且調書ニ附録トシテ表示シタル書  
類ニ於ケル記載ハ調書ニ於ケル記載ニ同シ

第三百二十二條 前條第二項第一號乃至第四號ニ掲ケタル調書  
ノ部分ハ法廷ニ於テ之ヲ關係人ニ讀聞カセ又ハ閱覽ノ爲メ  
之ヲ關係人ニ示ス  
調書ニハ前項ノ手續ヲ履ミタルヲ及ヒ承諾ヲ爲シタルヲ又

ハ承諾ヲ拒ミタル理由ヲ附記ス可シ

第三百二十三條 調書ニハ裁判長及ヒ裁判所書記署名捺印ス可

シ

裁判長差支アルキハ官等最モ高キ陪席判事之ニ代リ署名捺  
印ス區裁判所判事差支アルキハ其裁判所書記ノ署名捺印ヲ  
以テ足ル

第三百二十四條 受命判事若クハ受託判事又ハ區裁判所判事カ

法廷外ニ於テ爲ス審問ニモ亦裁判所書記ヲ立會ハシム

前四條ノ規定ハ右ノ審問調書ニ之ヲ準用ス

第三百二十五條 口頭辯論ノ爲メ規定シタル方式ノ遵守ハ調書  
ヲ以テノミ之ヲ證スルヲ得

第三百三十六條 總テ口頭ヲ以テ申立ヲ爲ス場合ニ於テハ裁判  
所書記ハ其調書ヲ作ル可シ



第二節 送達

第三百三十七條 送達ハ裁判所書記職權ヲ以テ之ヲ爲サシム  
裁判所書記ハ其所屬裁判所ノ執達吏ニ送達ノ施行ヲ委任シ  
又ハ送達ヲ施行ス可キ地ヲ管轄スル區裁判所ノ書記ニ送達  
ノ施行ヲ執達吏ニ委任ス可キヲ囑託ス  
裁判所書記ハ郵便ニ依テモ亦送達ヲ爲サシムルヲ得  
第二項ノ場合ニ於テハ執達吏又第三項ノ場合ニ於テハ郵便  
配達人ヲ以下ニ規定スル送達吏ト爲ス  
第三百三十八條 送達ハ謄本ノ交付ヲ以テ之ヲ爲シ又送達ス可  
キ書類ノ正本又ハ認證シタル謄本ヲ交付ス可キ規定アルキ  
ハ其正本又ハ謄本ノ交付ヲ以テ之ヲ爲ス  
當事者數人ノ代理人ニ爲シ又ハ同一ナル當事者ノ代理人數  
人中ノ一人ニ爲ス可キ送達ハ謄本又ハ正本ノ一通ヲ交付ス

ルヲ以テ足ル

第三百三十九條 訴訟能力ヲ有セサル原告若クハ被告ニ對スル  
送達ハ其法律上代理人ニ之ヲ爲ス  
公又ハ私ノ無形人及ヒ其資格ニ於テ訴へ又ハ訴へラル、  
ヲ得ル會社又ハ社團ニ對スル送達ハ其首長又ハ事務擔當者  
ニ之ヲ爲スヲ以テ足ル  
數人ノ首長若クハ事務擔當者アル場合ニ於テハ送達ハ其一  
人ニ之ヲ爲スヲ以テ足ル  
第四百十條 豫備後備ノ軍籍ニ在ラサル下士以下ノ軍人軍屬  
ニ對スル送達ハ其所屬ノ長官又ハ隊長ニ之ヲ爲ス  
第四百十一條 囚人ニ對スル送達ハ監獄署ノ首長ニ之ヲ爲ス  
第四百十二條 送達ハ財産權上ノ訴訟ニ付テハ總代理人ニ之  
ヲ爲シ又商業上ヨリ生シタル訴訟ニ付テハ代務人ニ之ヲ爲



スナ以テ原告若クハ被告ノ本人ニ爲シタルト同一ノ効力ヲ有ス

第四百十三條 訴訟代理人アルキハ送達ハ其代理人委任ノ旨趣ニ依リ原告若クハ被告ノ代理ヲ爲スノ權ヲ有スルキニ限リ其代理人ニ之ヲ爲ス然レモ原告若クハ被告ノ本人ニ爲シタル送達ハ其訴訟代理人アルキト雖モ効力ヲ有ス

第四百十四條 受訴裁判所ノ所在地ニ住居ヲモ事務所ヲモ有セサル原告若クハ被告ハ其所在地ニ假住所ヲ選定シテ之ヲ届出ツ可シ假住所選定ノ届出ハ遅クモ最近ノ口頭辯論ニ於テ之ヲ爲シ又其前ニ書面ヲ差出スルキハ其書面ヲ以テ之ヲ爲ス可シ前項ノ届出ヲ爲サルキハ裁判所書記又ハ其委任ヲ受ケタ

ル吏員交付ス可キ書類ヲ原告若クハ被告ノ名宛ニテ郵便ニ付シテ送達ヲ爲スヲ得此送達ハ其書類ノ原告若クハ被告ニ到達スルト否トヲ問ハス又何時ニ到達スルトヲ問ハス郵便ニ付シタル時ヲ以テ之ヲ爲シタルモノト看做ス

第四百十五條 送達ハ何レノ地ヲ問ハス送達ヲ受ク可キ人ニ出會ヒタル地ニ於テ之ヲ爲スヲ得然レモ其人カ其地ニ住居又ハ事務所ヲ有スルキ其住居又ハ事務所ノ外ニ於テ爲シタル送達ハ其受取ヲ拒マサリシキニ限り効力ヲ有ス

第一百三十九條第二項ノ場合ニ於テ特別ノ事務所アルキハ其事務所ノ外ニ於テ法律上代理人又ハ首長若クハ事務擔當者ニ爲シタル送達ハ其受取ヲ拒マサリシキニ限り効力ヲ有ス

第四百十六條 送達ヲ受ク可キ人ニ住居ニ於テ出會ハサルキハ其住居ニ於テスル送達ハ成長シタル同居ノ親族又ハ雇人



ニ之ヲ爲スヲ得

此規定ニ從ヒ送達ヲ施行スルヲ得サルキハ其送達ハ交付  
ス可キ書類ヲ管轄市町村長ニ預置キ送達ノ告知書ヲ作り之  
ヲ住居ノ戸ニ貼附シ且近隣ニ住居スル者二人ニ其旨ヲ口頭  
ヲ以テ通知シテ之ヲ爲スヲ得

第四百十七條 住居ノ外ニ事務所ヲ有スル人ニ對スル送達ハ  
事務所ニ於テ之ニ出會ハサルキハ其事務所ニ在ル營業使用  
人ニ之ヲ爲スヲ得此規定ハ辯護士ニモ亦之ヲ適用ス但此  
場合ニ於ケル送達ハ筆生ニモ亦之ヲ爲スヲ得

第四百十八條 第三百十九條第二項ノ場合ニ於テ法律上代理  
人又ハ首長若クハ事務擔當者ニ事務所ニ於テ出會ハス又ハ  
此等ノ者受取ニ付キ差支アルキハ送達ハ事務所ニ在ル他ノ  
役員又ハ雇人ニ之ヲ爲スヲ得

第四百十九條 前二條ノ規定ニ從ヒ送達ヲ施行スルヲ得サ  
ルキハ第四百十六條第二項ニ準シ送達ヲ爲ス可シ但住居ニ  
於ケル送達ヲ施行スルヲ得サルノ明白ナルキニ限ル  
前項ノ場合ニ於テハ送達告知書ノ貼附ハ事務所又ハ住居ノ  
戸ニ之ヲ爲ス

第四百十條 法律上ノ理由ナクシテ送達ノ受取ヲ拒ムキハ交  
付ス可キ書類ヲ送達ノ場所ニ差置ク可シ

第四百十一條 日曜日及ヒ一般ノ祝祭日ニハ執達吏ノ爲ス可  
キ送達ハ裁判官ノ許可ヲ得ルキニ限り之ヲ施行スルヲ得  
前項ノ規定ハ郵便ニ付シテ爲ス送達ヲ除クノ外ハ夜間ニ爲  
ス可キ送達ニ之ヲ適用ス夜間トハ日没ヨリ日出マテノ時間  
ヲ謂フ

右ノ許可ハ受訴裁判所ノ裁判長又ハ送達ヲ爲ス可キ地ヲ管



轄スル區裁判所ノ判事之ヲ與ヘ又ハ受命判事若クハ受託判事ノ完結ス可キ事件ニ在テハ其判事之ヲ與フ

許可ノ命令ハ認證シタル謄本ヲ以テ送達ノ際之ヲ交付ス可シ

本條ノ規定ヲ遵守セサル送達ハ之ヲ受取りタルキニ限り効力ヲ有ス

第二百五十二條 送達ニ付テハ之ヲ施行スル吏員ハ送達ノ地、年、

月、日、時、方法及ヒ受取人ノ受取證並ニ送達吏ノ署名捺印ヲ具備スル證書ヲ作ルヲ要ス

受取人受取ヲ拒ミ若クハ受取證ヲ出タスヲ拒ミタルキ又ハ受取證ヲ作ルヲ能ハサル旨ヲ述フルキハ之ヲ送達證書ニ記載ス可シ

第四百十四條第三項ノ場合ニ於テハ郵便ニ付シタル吏員ノ

報告書ヲ以テ送達ノ證ト爲スニ足ル

第一百五十三條 外國ニ在テ治外法權ヲ有スル帝國官吏其家族及ヒ從者ニ對シ外國ニ於テ施行ス可キ送達ハ外務大臣ニ囑託シテ之ヲ爲ス

第一百五十四條 前條ノ場合ヲ除クノ外外國ニ於テ施行ス可キ送達ハ外國ノ管轄官廳又ハ外國ニ駐在スル帝國ノ公使又ハ領事ニ囑託シテ之ヲ爲ス

第一百五十五條 出陣ノ軍隊又ハ役務ニ服シタル軍艦ノ乗組員ニ屬スル人ニ對スル送達ハ上班司令官廳ニ囑託シテ之ヲ爲スヲ得

第一百五十六條 前三條ノ場合ニ於テ必要ナル囑託書ハ受訴裁判所ノ裁判長之ヲ發ス  
送達ハ囑託ヲ受ケタル官廳又ハ官吏ノ送達施行濟ノ證書ヲ



以テ之ヲ證ス

第五百十七條 原告若クハ被告ノ現在所知レサルキ又ハ外國ニ於テ爲ス可キ送達ニ付テハ其規定ニ從フヲ能ハス若クハ之ニ從フモ其効ナキヲ豫知スルキハ其送達ハ公ノ告示ヲ以テ之ヲ爲スヲ得

第五百十八條 公示送達ハ原告若クハ被告ノ申立ニ因リ裁判所ノ命ヲ以テ裁判所書記之ヲ取扱フ其送達ハ交付ス可キ書類ヲ裁判所ノ掲示板ニ貼附シテ之ヲ爲ス判決及ヒ決定ニ在テハ其裁判ノ部分ノミヲ貼附ス可シ右ノ外裁判所ハ送達ス可キ書類ノ抄本ヲ一箇又ハ數箇ノ新聞紙ニ一回又ハ數回掲載ス可キヲ命スルヲ得其抄本ニハ裁判所、當事者並ニ訴訟物及ヒ送達ス可キ書類ノ要旨ヲ掲クルヲ要ス

第五百十九條 公示送達ハ書類ノ貼附ヨリ十四日ヲ經過シタル日ヲ以テ之ヲ爲シタルモノト看做ス然レモ裁判所ハ公示送達ヲ命スルニ際シ此ヨリ長キ期間ヲ必要トスルキハ相當ナル期間ヲ定メ之ヲ宣言スルヲ得同一ノ事件ニ付キ同一ノ原告若クハ被告ニ對シテ爲ス其後ノ公示送達ハ貼附ヲ以テ之ヲ爲シタルモノト看做ス

### 第三節 期日及ヒ期間

第一百六十條 期日ハ裁判長日及ヒ時ヲ以テ之ヲ定ム

第一百六十一條 期日ハ已ムヲ得サル場合ニ限り日曜日及ヒ一般ノ祝祭日ニ之ヲ定ムルヲ得

第一百六十二條 期日ニ付テノ呼出ハ裁判長ノ命ニ從ヒ裁判所書記正本ノ送達ヲ以テ之ヲ爲ス言渡セシ裁判ニ示シタル呼出ハ之ヲ送達スルヲ要セス但



第三者ヲ呼出ス可キ場合ニ於テ其不在ニテ言渡ヲ爲シタル  
キハ此限ニ在ラス

第六十三條 期日ハ裁判所内ニ於テ之ヲ開ク但臨檢又ハ裁  
判所ニ出頭スルニ差支アル人ノ審問其他裁判所内ニ於テ爲  
スヲ得サル行爲ヲ要スルキハ此限ニ在ラス

第六十四條 期日ハ事件ノ呼上ヲ以テ始マル  
原告若クハ被告カ期日ノ終ニ至ルマテ辯論ヲ爲サルキハ  
期日ヲ怠リタルモノト看做ス

第六十五條 裁判所又ハ裁判長ノ定ムル期間ノ進行ハ期間  
ヲ定メタル書類ノ送達ヲ以テ始マリ又其送達ヲ要セサル場  
合ニ於テハ期間ノ言渡ヲ以テ始マル但期間指定ノ際此ヨリ  
遅キ起期ヲ定メタルキハ此限ニ在ラス

第六十六條 期間ヲ計算スルニ時ヲ以テスルモノハ即時ヨ

リ起算シ又日ヲ以テスルモノハ初日ヲ算入セス

第六十七條 一日ノ期間ハ二十四時トシ一个月ノ期間ハ三  
十日トシ一年ノ期間ハ曆ニ從フ

期間ノ終カ日曜日又ハ一般ノ祝祭日ニ當ルキハ其日ヲ期間  
ニ算入セス

第六十八條 法律上ノ期間ハ裁判所ノ所在地ニ住居セサル  
原告若クハ被告ノ爲メ其住居地ト裁判所所在地トノ距離ノ  
割合ニ應シ海陸路八里毎ニ一日ヲ伸長ス八里以外ノ端數ハ  
三里ヲ超ユルキ亦同シ

裁判所ハ外國又ハ島嶼ニ於テ住所ヲ有スル原告若クハ被告  
ノ爲メ特ニ附加期間ヲ定ムルヲ得

第六十九條 期間ノ進行ハ裁判所ノ休暇ニ依テ停止ス其期  
間ノ殘餘ノ部分ハ休暇ノ終ヲ以テ其進行ヲ始ム期間ノ初カ



休暇ニ當ルキハ其期間ノ進行ハ休暇ノ終ヲ以テ始マル  
前項ノ規定ハ不變期間及ヒ休暇事件ノ期間ニハ之ヲ適用セ  
ス  
不變期間ハ此法律ニ於テ不變期間トシテ掲ケタル期間ニ限  
ル  
休暇事件トハ帝國裁判所構成法第三百三十五條第三百三十六條  
ニ掲ケタル事件ヲ謂フ

第七十條 期日ノ變更、辯論ノ延期、辯論續行ノ期日ノ指定ハ  
申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ之ヲ爲スヲ得但申立ニ因レル  
期日ノ變更ハ合意ノ場合ヲ除クノ外顯著ナル理由アルキニ  
限り之ヲ許ス

第七十一條 期間ハ不變期間ヲ除クノ外當事者ノ合意ノ申  
立ヲ以テ之ヲ短縮シ又ハ伸長スルヲ得

裁判所又ハ裁判長ノ定ムル期間及ヒ法律上ノ期間ハ合意ナ  
キモ申立ニ因リ顯著ナル理由アルキハ之ヲ短縮シ又ハ伸長  
スルヲ得然レモ法律上ノ期間ノ短縮又ハ伸長ハ此法律ニ  
特定シタル場合ニ限り之ヲ許ス

伸長ニ係ル新期間ハ前期間ノ滿了ヨリ之ヲ起算ス

第七十二條 期日ノ變更又ハ期間ノ短縮若クハ伸長ニ付テ  
ノ申請ノ理由ハ之ヲ疏明ス可シ其申請ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲  
スヲ得

申請ノ裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スヲ得  
同一期日ノ再度ノ變更又ハ同一期間ノ再度ノ伸長ハ相手方  
ノ承諾書ヲ提出セサルキハ相手方ヲ審訊シタル後ニ限り之  
ヲ許スヲ得又相手方カ異議ヲ述フルキハ顯著ナル差支ノ  
理由及ヒ其差支ヲ除去スルノ特別ナル困難ヲ生シタルキ



ニ限り之ヲ許スヲ得訴訟代理人ノ差支ニ原因スル期日ノ  
再度ノ變更又ハ期間ノ再度ノ伸長ハ相手方ノ承諾アルニ非  
サレハ之ヲ許サス

期日ノ變更又ハ期間ノ伸長ニ付テノ申請ヲ却下スル裁判ニ  
對シテハ不服ヲ申立ツルヲ得ス

第一百七十三條 本節ニ於テ裁判所及ヒ裁判長ニ與ヘタル權ハ  
受命判事又ハ受託判事ノ定ム可キ期日及ヒ期間ニ付テハ其  
判事ニモ亦屬スルモノトス

第四節 懈怠ノ結果及ヒ原狀回復

第一百七十四條 訴訟行爲ヲ怠リタル原告若クハ被告ハ其訴訟  
行爲ヲ爲スノ權利ヲ失フ但此法律ニ於テ追完ヲ許スルハ此  
限ニ在ラス

法律上懈怠ノ結果ハ當然生スルモノトス但此法律ニ於テ失

權ヲ爲サシムルヲニ付キ相手方ノ申立ヲ要スルキハ此限ニ  
在ラス

第一百七十五條 天災其他避ク可カラサル事變ノ爲メニ不變期  
間ヲ遵守スルヲ得サル原告若クハ被告ニハ申立ニ因リ原  
狀回復ヲ許ス

原告若クハ被告カ故障期間ヲ懈怠シタルキハ其過失ニ非ス  
シテ闕席判決ノ送達ヲ知ラサリシ場合ニ於テモ亦之ニ原狀  
回復ヲ許ス

第一百七十六條 原狀回復ハ十四日ノ期間内ニ之ヲ申立ツルヲ  
要ス

右期間ハ障碍ノ止ミタル日ヲ以テ始マル此期間ハ當事者ノ  
合意ニ因リ之ヲ伸長スルヲ得ス  
懈怠シタル不變期間ノ終ヨリ起算シテ一个年ノ滿了後ハ原



狀回復ヲ申立ツルコトヲ得ス

第七十七條 原狀回復ハ追完スル訴訟行爲ニ付キ裁判ヲ爲スノ權アル裁判所ニ書面ヲ差出シテ之ヲ申立ツ可シ其書面ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一 原狀回復ノ原因タル事實

第二 原狀回復ノ疏明方法

第三 懈怠シタル訴訟行爲ノ追完

即時抗告ノ提出ヲ懈怠シタルキハ原狀回復ノ申立ハ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所又ハ抗告裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得

第七十八條 原狀回復ノ申立ニ付テノ訴訟手續ハ追完スル訴訟行爲ニ付テノ訴訟手續ト之ヲ併合ス然レモ裁判所ハ先ツ申立ニ付テノ辨論及ヒ裁判ノミニ其訴訟手續ヲ制限スル

コトヲ得

申立ノ許否ニ關スル裁判及ヒ其裁判ニ對スル不服ノ申立ニ付テハ追完スル訴訟行爲ノ性質ニ從ヒ此等ノ關係ニ於テ行ハル可キ規定ヲ適用ス然レモ申立ヲ爲シタル原告若クハ被告ハ故障ヲ爲スコトヲ得ス

原狀回復ノ費用ハ申立人之ヲ負擔ス但相手方ノ不當ナル異議ニ因リ生シタルモノハ此限ニ在ラス

第五節 訴訟手續ノ中斷及ヒ中止

第七十九條 原告若クハ被告ノ死亡シタル場合ニ於テハ承繼人カ訴訟手續ヲ受繼クマテ之ヲ中斷ス

受繼ヲ遲滞シタルキハ裁判所ハ申立ニ因リ受繼及ヒ本案辯論ノ爲メ其承繼人ヲ呼出ス

受繼ノ遲滞ハ申立人之ヲ疏明シ呼出狀ハ承繼人ニ之ヲ送達



ス  
承繼人期日ニ出頭セサルキハ申立ニ因リ相手方ノ主張シタル承繼ヲ自白シタルモノト看做シ且裁判所ハ缺席判決ヲ以テ承繼人訴訟手續ヲ受繼キタリト言渡ス又本案ノ辯論ハ故障期間ノ滿了後始メテ之ヲ爲シ又其期間内ニ故障ヲ申立テタルキハ其完結後始メテ之ヲ爲ス

第八十條 原告若クハ被告ノ財産ニ付キ破産ノ開始シタル場合ニ於テ訴訟手續ノ破産財團ニ關スルキハ破産ニ付テノ規定ニ從ヒ之ヲ受繼キ又ハ破産手續ヲ解止スルマテ之ヲ中斷ス

第八十一條 原告若クハ被告カ訴訟能力ヲ失ヒ又ハ其法律上代理人カ死亡シ又ハ其代理權ノ原告若クハ被告ノ訴訟能力ヲ得ル前ニ消滅シタルキハ訴訟手續ハ法律上代理人又ハ

新法律上代理人カ其任設ヲ相手方ニ通知シ又ハ相手方カ訴訟手續ヲ續行セントスルコトヲ其代理人ニ通知スルマテ之ヲ中斷ス

第八十二條 原告若クハ被告ノ死亡ニ因リ訴訟手續ヲ中斷スル場合ニ於ケル訴訟手續ノ受繼ニ關シ遺產ニ付キ管理人ヲ任設スルキハ前條ノ規定又遺產ニ付キ破産ヲ開始スルキハ第八十條ノ規定ヲ適用ス

第八十三條 戰爭其他ノ事故ニ因リ裁判所ノ行務ヲ止メタルキハ此情況ノ繼續間訴訟手續ヲ中斷ス

第八十四條 訴訟代理人ヲ以テ訴訟ヲ爲ス場合ニ於テ原告若クハ被告カ死亡シ又ハ訴訟能力ヲ失ヒ又ハ法律上代理人ノ欠缺スルキハ委任消滅ノ通知ニ因リ訴訟手續ヲ中斷ス訴訟手續ノ受繼ニ付テハ第七十九條、第八十一條、第八



十二條ノ規定ニ從フ

第八十五條 原告若クハ被告カ戰時兵役ニ服スルキ又ハ官廳ノ布令、戰爭其他ノ事變ニ因リ受訴裁判所ト交通ノ絶ヘタル地ニ在ルキハ受訴裁判所ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ障礙ノ消除スルマテ訴訟手續ノ中止ヲ命スルヲ得

第八十六條 訴訟手續中止ノ申請ハ受訴裁判所ニ之ヲ提出ス其申請ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スヲ得

其裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スヲ得

第八十七條 訴訟手續ノ中斷及ヒ中止ハ各期間ノ進行ヲ止メ及ヒ中斷又ハ中止ノ終リタル後更ニ全期間ノ進行ヲ始ムルノ効力ヲ有ス  
中斷及ヒ中止ノ間本案ニ付キ爲シタル原告若クハ被告ノ訴訟行爲ハ他ノ一方ニ對シ其効力ナシ

口頭辯論ノ終結後ニ生シタル中斷ハ其辯論ニ基キテ爲ス可キ裁判ノ言渡ヲ妨クルヲ無シ

第八十八條 中斷シ又ハ中止シタル訴訟手續ノ受繼及ヒ本節ニ定メタル通知ハ原告若クハ被告ヨリ其書面ヲ受訴裁判所ニ差出シ裁判所ハ相手方ニ之ヲ送達ス可シ

第八十九條 當事者ハ訴訟手續ヲ休止ス可キノ合意ヲ爲スヲ得其合意ハ不變期間ノ進行ニ影響ヲ及ボサス

口頭辯論ノ期日ニ於テ當事者雙方出頭セサルキハ訴訟手續ハ其一方ヨリ更ニ口頭辯論ノ期日ヲ定ム可キヲ申立ツルマテ之ヲ休止ス  
一个年内ニ前項ノ申立ヲ爲サ、ルキハ本訴及ヒ反訴ヲ取下ケタルモノト看做ス

第九十條 本節ノ規定其他此法律ノ規定ニ基キ訴訟手續ノ



中止ヲ命スル裁判ニ對シテハ抗告ヲ爲スコトヲ得又其中止ヲ拒ム裁判ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第二編 第一審ノ訴訟手續

第一章 地方裁判所ノ訴訟手續

第一節 判決前ノ訴訟手續

第九十一條 訴ノ提起ハ訴狀ヲ裁判所ニ差出シテ之ヲ爲ス  
訴狀ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一 當事者及ヒ裁判所ノ表示

第二 起シタル請求ノ一定ノ目的物及ヒ其請求ノ一定ノ

原因

第三 一定ノ申立

此他訴狀ニハ裁判所ノ管轄カ訴訟物ノ價額ニ依リ定マル場  
合ニ於テ訴訟物カ一定ノ金額ニ非サルキハ其價額ヲ掲ク可  
シ  
準備書面ニ關スル一般ノ規定ハ訴狀ニモ亦之ヲ適用ス



第九十二條 同一ノ被告ニ對スル原告ノ請求數箇アル場合ニ於テ其各請求ニ付キ受訴裁判所カ管轄權ヲ有シ且法律ニ於テ同一種類ノ訴訟手續ヲ許スキハ原告ハ其請求ヲ一箇ノ訴ニ併合スルコトヲ得但民法ノ規定ニ反スルキハ此限ニ在ラス

第九十三條 訴狀カ第九十一條第一號乃至第三號ノ規定ニ適セサルキハ相當ノ期間ヲ定メ訴訟指揮上ノ命令ヲ以テ其期間内ニ欠缺ヲ補正ス可キコトヲ命シ若シ原告此命ニ従ハサルキハ其期間ノ滿了後訴狀ヲ差戻ス可シ

此差戻ノ命令ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第九十四條 訴狀カ第九十一條第一號乃至第三號ノ規定ニ適スルキハ口頭辯論ノ期日ヲ定メテ之ヲ被告ニ送達ス可シ

第九十五條 訴狀ノ送達ト口頭辯論ノ期日トノ間ニハ少クモ二十日ノ時間ヲ存スルコトヲ要ス

外國ニ於テ送達ヲ施行ス可キキハ裁判長相當ノ時間ヲ定ム  
第九十六條 訴訟物ノ權利拘束ハ訴狀ノ送達ニ因テ生ス  
權利拘束ハ左ノ効力ヲ有ス

- 第一 權利拘束ノ繼續中原告若クハ被告ヨリ同一ノ訴訟物ニ付キ他ノ裁判所ニ於テ本訴又ハ反訴ヲ以テ請求ヲ爲シタルキハ相手方ハ權利拘束ノ抗辯ヲ爲スコトヲ得
- 第二 受訴裁判所ノ管轄ハ訴訟物ノ價額ノ増減、住所ノ變更其他管轄ヲ定ムル情況ノ變更ニ因テ變換スルコト無シ
- 第三 原告ハ訴ノ原因ヲ變更スルノ權利ナシ但變更シタル訴ニ對シ本案ノ口頭辯論前被告カ異議ヲ述ヘサルキハ此限ニ在ラス



第九十七條 原告カ訴ノ原因ヲ變更セスシテ左ノ諸件ヲ爲

スルハ被告ハ異議ヲ述フルヲ得ス

第一 事實上又ハ法律上ノ申述ヲ補充シ又ハ更正スルヲ

第二 本案又ハ附帶請求ニ付キ訴ノ申立ヲ擴張シ又ハ減

縮スルヲ

第三 最初求メタル物ノ滅盡又ハ變更ニ因リ賠償ヲ求ム

ルヲ

第九十八條 訴ノ原因ニ變更ナシトスル裁判ニ對シテハ不

服ヲ申立ツルヲ得ス

第九十九條 訴ノ全部又ハ一分ハ本案ニ付キ被告ノ第一口

頭辯論ノ始マルマテハ被告ノ承諾ナクシテ之ヲ取下ケ又其

後口頭辯論ノ終結ニ至ルマテハ被告ノ承諾ヲ得テ之ヲ取下

クルヲ得

訴ノ取下ハ口頭辯論ニ於テ之ヲ爲サ、ルキハ書面ヲ以テ之  
ヲ爲ス可シ

訴狀ヲ既ニ送達シタル場合ニ於テハ訴取下ノ書面ハ之ヲ被

告ニ送達ス可シ

適法ナル取下ハ權利拘束ノ總テノ効力ヲ消滅セシムルノ結

果ヲ生ス

取下ケタル訴ヲ再ヒ起シタルキハ被告ハ前訴訟費用ノ辨濟

ヲ受クルマテ應訴ヲ拒ムヲ得

第二百條 訴狀送達ノ際十四日ノ期間内ニ答辯書ヲ差出ス可

キヲ被告ニ催告ス可シ

答辯書ニハ準備書面ニ關スル一般ノ規定ヲ適用ス

第二百一條 訴カ管轄裁判所ニ於テ權利拘束ト爲リタルキハ

被告ハ原告ニ對シ其裁判所ニ反訴ヲ起スヲ得



然レモ財産權上ノ請求ニ非サル請求ニ係ル反訴又ハ其目的物ニ付キ專屬管轄ノ規定アル反訴ハ若シ其反訴カ本訴ナルキ其裁判所ニ於テ管轄權ヲ有ス可キ場合ニ限り之ヲ爲スヲ許ス

反訴ニ對シテハ更ニ反訴ヲ爲スヲ得ス

第二百二條 反訴ハ答辯書若クハ特別ノ書面ヲ以テ又ハ口頭辯論中相手方ノ面前ニ於テ口頭ヲ以テ之ヲ爲スヲ得然レモ答辯書差出ノ期間内ニ差出シタル書面ヲ以テ起サル反訴ハ被告ノ請求ノ全部又ハ一分ト相殺ヲ爲ス可キ場合ニ於テ同時ニ被告カ自己ノ過失ニ因ラスシテ其以前反訴ヲ起スヲ得サリシヲ疏明スルキニ限り之ヲ爲スヲ許ス

第二百三條 訴ニ關スル此法律ノ規定ハ反訴ニ之ヲ適用ス但其規定ニ因リ差異ノ生ス可キキハ此限ニ在ラス

第二百四條 裁判長ハ申立ニ因リ其命令ヲ以テ第二百條ニ定メタル期間ヲ相當ニ短縮若クハ伸長シ又第九十五條ニ定メタル時間ヲ切迫ナル危險ノ場合ニ限り二十四時マテニ短縮スルヲ得

前項ノ短縮ハ此カ爲メ答辯書ヲ差出スヲ得サルキト雖モ亦之ヲ爲スヲ得

本條ノ規定ハ第六十八條ニ掲ケタル規定ヲ妨ケス

第二百五條 各當事者ハ訴狀又ハ答辯書ニ掲ケサリシ事實上ノ主張若クハ證據方法又ハ申立ニ付キ相手方カ豫メ穿鑿ヲ爲スニ非サレハ陳述ヲ爲ス能ハスト豫知スル事項ヲ口頭辯論ノ前ニ書面ニテ差出ス可シ但其書面ヲ相手方ニ送達スルノ時間及ヒ相手方ヲシテ必要ナル穿鑿ヲ爲スノ時間ヲ得セシム可シ



口頭辯論ノ延期ヲ爲スルハ裁判所ハ爾後必要ナル準備書面  
ヲ差出ス可キ期間ヲ定ムルヲ得

第二百六條 口頭辯論ハ一般ノ規定ニ從ヒ之ヲ爲ス

第二百七條 妨訴ノ抗辯ハ本案ニ付テノ被告ノ辯論前同時ニ  
之ヲ提出ス可シ

左ニ掲クルモノヲ妨訴ノ抗辯トス

- 第一 無訴權ノ抗辯
- 第二 裁判所管轄違ノ抗辯
- 第三 權利拘束ノ抗辯
- 第四 訴訟能力ノ欠缺又ハ法律上代理ノ欠缺ノ抗辯
- 第五 訴訟費用保證ノ欠缺ノ抗辯
- 第六 再訴ニ付キ前訴訟費用未濟ノ抗辯
- 第七 延期ノ抗辯

本案ニ付キ被告ノ口頭辯論ノ始マリタル後ハ妨訴ノ抗辯ハ  
被告ノ有効ニ拋棄スルヲ得サルモノナルキ又ハ被告ノ過  
失ニ非スシテ本案ノ辯論前ニ其抗辯ヲ主張スル能ハサリシ  
ヲテ疏明スルキニ限り之ヲ主張スルヲ得

第二百八條 被告カ妨訴ノ抗辯ニ基キ本案ノ辯論ヲ拒ムキ又  
ハ裁判所カ申立ニ因リ若クハ職權ヲ以テ別ニ辯論ヲ命スル  
キハ其抗辯ニ付キ別ニ辯論ヲ爲シ及ヒ判決ヲ以テ裁判ヲ爲  
ス可シ

妨訴ノ抗辯ヲ棄却スル判決ハ上訴ニ關シテハ終局判決ト看  
做ス但裁判所ハ申立ニ因リ本案ニ付キ辯論ヲ爲ス可キヲ命  
スルヲ得

第二百九條 妨訴ノ抗辯完結後裁判所ハ計算事件、財産分別及  
ヒ此ニ類スル訴訟ニ於テハ口頭辯論ヲ延期シ準備手續ヲ命



スルヲ得

第二百十條 攻撃及ヒ防禦ノ方法(抗辯、反訴、再抗辯等)ハ第二  
二條ニ規定スル制限ヲ以テ判決ニ接着スル口頭辯論ノ終結  
ニ至ルマテ之ヲ提出スルヲ得  
然レモ裁判所ハ時機ニ後レテ攻撃及ヒ防禦ノ方法ヲ提出シ  
タル爲メニ訴訟完結ノ遅延シタルキハ裁判官ノ心證ニ因リ  
遅延ノ責アリトスル勝訴ノ原告若クハ被告ニ訴訟費用ノ全  
部又ハ一分ヲ負擔セシムルヲ得

第二百十一條 被告ヨリ時機ニ後レテ提出シタル防禦ノ方法  
ハ裁判所カ若シ之ヲ許スニ於テハ訴訟ヲ遅延ス可ク且被告  
ハ訴訟ヲ遅延セシメントスルノ故意ヲ以テ又ハ甚シキ怠慢  
ニ因リ早ク之ヲ提出セサリシコトノ心證ヲ得タルキハ申立ニ  
因リ之ヲ却下スルヲ得

第二百十二條 判決ニ接着スル口頭辯論ノ終結ニ至ルマテハ  
訴訟ノ裁判ノ全部又ハ一分カ訴訟ノ進行中ニ争ト爲リタル  
權利關係ノ成立又ハ不成立ニ繋ルキハ原告ハ訴ノ申立ノ擴  
張ニ依リ又被告ハ反訴ノ提起ニ依リ判決ヲ以テ其權利關係  
ヲ確定センコトヲ申立ツルヲ得

第二百十三條 訴狀其他ノ準備書面ニ於テ主張セサル請求ノ  
權利拘束ハ口頭辯論ニ於テ其請求ヲ主張シタル時ヲ以テ始  
マル

第二百十四條 各當事者ハ事實上ノ主張ヲ證明シ又ハ之ヲ辯  
駁セン爲メニ用井ントスル證據方法ヲ申出テ且相手方ヨリ  
申出テタル證據方法ニ付キ陳述ス可シ  
各箇ノ證據方法ニ付テノ證據申出及ヒ之ニ關スル陳述ハ第  
六節乃至第十節ノ規定ニ從フ



第二百十五條 證據方法及ヒ證據抗辯(證據方法ノ適法、法律上ノ効力及ヒ信用ニ對スル抗辯)ハ判決ニ接着スル口頭辯論ノ終結ニ至ルマテ之ヲ主張スルコトヲ得

證據方法及ヒ證據抗辯ノ時機ニ後レタル提出ニ付テハ第二百十條第二項及ヒ第二百十一條ノ規定ヲ準用ス

第二百十六條 證據調並ニ證據決定ヲ以テスル特別ノ證據調手續ノ命令ハ第五節乃至第十節ノ規定ニ從フ

第二百十七條 當事者ハ訴訟ノ關係ヲ表明シ證據調ノ結果ニ付キ辯論ヲ爲スコシ

受命判事又ハ受託判事ノ面前ニ於テ證據調ヲ爲シタルキハ當事者ハ證據調ニ關スル審問調書ニ基キ其結果ヲ演述スコシ

第二百十八條 裁判所ハ民法又ハ此法律ノ規定ニ反セサル限

リハ辯論ノ全旨趣及ヒ或ル證據調ノ結果ヲ斟酌シ事實上ノ主張ヲ眞實ナリト認ム可キヤ否ヲ自由ナル心證ヲ以テ判斷スコシ

第二百十九條 裁判所ニ於テ顯著ナル事實ハ之ヲ證スルコトヲ要セス

第二百二十條 外國ノ現行法又ハ內國ノ地方慣習法、商慣習及ヒ規約ハ之ヲ證スコシ裁判所ハ當事者カ其證明ヲ爲スト否トニ拘ハラズ職權ヲ以テ必要ナル取調ヲ爲スコトヲ得

第二百二十一條 此法律ノ規定ニ依リ事實上ノ主張ヲ疏明ス可キキハ裁判官ヲシテ其主張ヲ眞實ナリト認メシム可キ證據方法又ハ證據原因ヲ申出ツルヲ以テ足ル但即時ニ爲スコトヲ得サル證據調ハ之ヲ許サス

第二百二十二條 裁判所ハ事件ノ如何ナル程度ニ在ルヲ問ハ



ス自ラ又ハ受命判事若クハ受託判事ニ依リ訴訟又ハ或ル争  
點ノ和解ヲ試ムルノ權アリ和解ヲ試ムル爲メニハ當事者ノ  
自身出頭ヲ命スルヲ得

第二百二十三條 申立ハ準備書面ニ依リ之ヲ朗讀スルヲ要  
ス

準備書面ヲ交付セサルキ又ハ其書面ニ掲ケサル申立アルキ  
ハ調書ニ附録トシテ添附ス可キ書面ヲ差出シ之ヲ朗讀スル  
ヲ要ス

重要ノ點ニ於テ以前朗讀シタルモノト異ナル申立ニ付テモ  
亦同シ

本條ノ規定ヲ遵守セサルキハ申立ナキモノト看做ス

第二百二十四條 前條ノ申立ヲ除クノ外準備書面ニ掲ケサル  
重要ナル陳述又ハ其書面ノ旨趣ト重要ノ點ニ於テ差異ノ存

スル事項ハ其差異カ附加削除其他ノ變更ニ係ルヲ問ハス申  
立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ調書若クハ其附録トシテ添附ス可  
キ爲メ差出シタル書面ニ依テ之ヲ明確ニス可シ

第二百二十五條 當事者ハ訴訟記録ヲ閱覽シ且裁判所書記ヲ  
シテ其正本、抄本及ヒ謄本ヲ付與セシムルヲ得

裁判長ハ第三者カ權利上ノ利害ヲ疏明スルキニ限り當事者  
ノ承諾ナクシテ訴訟記録ノ閱覽及ヒ其抄本并ニ謄本ノ付與  
ヲ許スヲ得

判決、決定、命令ノ草案及ヒ其準備ニ供シタル書類并ニ評議又  
ハ處罰ニ關スル書類ハ其原本ナルト謄本ナルトヲ問ハス之  
ヲ閱覽スルヲ許サス

### 第二節 判決

第二百二十六條 訴訟カ裁判ヲ爲スニ熟スルキハ裁判所ハ終



局判決ヲ以テ裁判ヲ爲ス。

同時ニ辯論及ヒ裁判ヲ爲ス爲メ併合シタル數箇ノ訴訟中ノ一ノミ裁判ヲ爲スニ熟スルキ亦同シ

第二百二十七條 一ノ訴ヲ以テ起シタル數箇ノ請求中ノ一箇又ハ一箇ノ請求中ノ一分又ハ反訴ヲ起シタル場合ニ於テハ本訴若クハ反訴ノミ裁判ヲ爲スニ熟スルキハ裁判所ハ終局判決(一分判決)ヲ以テ裁判ヲ爲ス

然レモ裁判所ハ事件ノ情況ニ從ヒ一分判決ヲ相當トセサルキハ之ヲ爲サ、ルコトヲ得

第二百二十八條 各箇ノ獨立ナル攻撃若クハ防禦ノ方法又ハ中間ノ争カ裁判ヲ爲スニ熟スルキハ中間判決ヲ以テ裁判ヲ爲スコトヲ得

第二百二十九條 請求ノ原因及ヒ數額ニ付キ争アルキハ裁判

所ハ先ツ其原因ニ付キ裁判ヲ爲スコトヲ得

請求ノ原因ヲ正當ナリトスル判決ハ上訴ニ關シテハ終局判決ト看做シ其判決確定ニ至ルマテ爾後ノ手續ヲ中止ス然レモ裁判所ハ申立ニ因リ其數額ニ付キ辯論ヲ爲スコキヲ命スルコトヲ得

第二百三十條 口頭辯論ノ際原告其訴ヘタル請求ヲ拋棄シ又ハ被告之ヲ認諾スルキハ裁判所ハ申立ニ因リ其拋棄又ハ認諾ニ基キ判決ヲ以テ却下又ハ敗訴ノ言渡ヲ爲スコシ

第二百三十一條 判決ハ辯論ヲ經タル總テノ攻撃及ヒ防禦ノ方法ヲ包括ス可キモノトス  
然レモ數箇ノ獨立ナル攻撃又ハ防禦ノ方法中其一箇ヲ適切ナリトスルキハ裁判所ハ他ノ方法ニ付キ判斷スルノ義務ナシ



第二百三十二條 裁判所ハ申立テサル事物ヲ原告若クハ被告ニ歸セシムルノ權ナシ

裁判所ハ終局判決ヲ爲ス場合ニ於テハ訴訟費用ノ負擔ニ限リ申立アラサルモ判決ヲ爲ス可シ然レモ一分判決ヲ爲ス場合ニ於テハ費用ノ裁判ヲ後ノ判決ニ讓ルコトヲ得

第二百三十三條 判決ハ其基本タル口頭辯論ニ臨席シタル判事ノミ之ヲ爲スコトヲ得

第二百三十四條 判決ハ口頭辯論ノ終結スル期日又ハ直チニ指定スル期日ニ於テ之ヲ言渡ス但其期日ハ七日ヲ過クルコトヲ得ス

第二百三十五條 判決ノ言渡ハ判決主文ノ朗讀ニ因リ之ヲ爲ス闕席判決ノ言渡ハ其主文ヲ作ラサル前ト雖モ之ヲ爲スコトヲ得

裁判ノ理由ヲ言渡スコトヲ至當ト認ムルキハ判決ノ言渡ト同時ニ其理由ヲ朗讀シ又ハ口頭ニテ其要領ヲ告ク可シ

第二百三十六條 判決ノ言渡ハ當事者又ハ其一方ノ在廷スルト否トニ拘ハラス其効力ヲ有ス

言渡アリタル判決ニ基キ訴訟手續ヲ續行シ又ハ他ニ其判決ヲ使用スル原告若クハ被告ノ權ハ此法律ニ特定シタル場合ヲ除クノ外相手方ニ其判決ヲ送達スルト否トニ拘ハラサルモノトス

第二百三十七條 判決ニハ左ノ諸件ヲ掲ク可シ

第一 當事者及ヒ其法律上代理人ノ氏名、身分、職業及ヒ住所

第二 事實及ヒ爭點ノ摘示但其摘示ハ當事者ノ口頭演述ニ基キ殊ニ其提出シタル申立ヲ表示シテ之ヲ爲スモノ



トス

第三 裁判ノ理由

第四 判決主文

第五 裁判所ノ名稱、裁判ニ參與シタル判事ノ官氏名

第二百三十八條 判決ノ原本ニハ裁判ニ參與シタル判事署名

捺印ス若シ陪席判事署名捺印スルニ差支アルキハ其理由ヲ

開示シテ裁判長其旨ヲ附記シ裁判長差支アルキハ官等最モ

高キ陪席判事之ヲ附記ス

判決ノ原本ハ言渡ノ日ヨリ起算シテ七日内ニ裁判所書記ニ

之ヲ交付ス可シ

裁判所書記ハ言渡ノ日及ヒ原本領收ノ日ヲ原本ニ附記シ且

其附記ニ署名捺印ス可シ

第二百三十九條 各當事者ハ判決ノ送達アラントテ申立ツル

トテ得其申立アリタルキハ判決ノ正本ヲ送達ス可シ

第二百四十條 未タ判決ヲ言渡サス又ハ未タ判決ニ署名捺印

セサル間ハ裁判所書記ハ其正本、抄本及ヒ謄本ヲ付與スルコ

ト得ス

裁判所書記ハ判決ノ正本、抄本及ヒ謄本ニ署名捺印シ且裁判

所ノ印ヲ捺シテ之ヲ認證ス可シ

第二百四十一條 裁判所ハ其言渡シタル終局判決及ヒ中間判

決ノ中ニ包含シタル裁判ニ羈束セラル

第二百四十二條 裁判所ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ何時ニ

テモ判決中ノ違算、書損及ヒ此ニ類スル著シキ誤謬ヲ更正ス

可キモノトス

此更正ニ付テハ口頭辯論ヲ經スシテ裁判ヲ爲スコトヲ得

右更正ノ申立ヲ却下スル決定ニ對シテハ上訴ヲ爲スコトヲ得



ス更正ヲ言渡ス決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スヲ得  
第二百四十三條 主タル請求若クハ附帶ノ請求又ハ費用ノ全  
部若クハ一部ノ裁判ヲ爲スニ際シ脱漏シタルキハ申立ニ因  
リ追加ノ裁判ヲ以テ判決ヲ補充ス可シ  
判決ノ言渡後直ニ追加裁判ノ申立ヲ爲サ、ルキハ遅クモ  
判決ノ正本ヲ送達シタル日ヨリ起算シテ七日ノ期間内ニ之  
ヲ爲スヲ要ス  
追加裁判ノ申立アルキハ即時ニ又ハ新期日ヲ定メテ口頭辯  
論ヲ爲サシム可シ其辯論ハ訴訟ノ完結セサル部分ニ限り之  
ヲ爲スモノトス  
第二百四十四條 判決ヲ更正シ又ハ補充スル裁判ハ判決ノ原  
本及ヒ正本ニ之ヲ追加シ若シ正本ニ之ヲ追加スルヲ得サ  
ルキハ更正又ハ補充ノ裁判ノ正本ヲ作ル可シ

第二百四十五條 判決ハ其主文ニ包含スルモノニ限り確定ス  
第二百四十六條 口頭辯論ニ基キ爲ス裁判所ノ決定ハ之ヲ言  
渡スヲ要ス  
第二百三十四條、第二百三十五條ノ規定ハ裁判所ノ決定ニ之  
ヲ準用シ又第二百三十六條、第二百四十條及ヒ第二百四十一  
條ノ規定ハ裁判所ノ決定及ヒ裁判長并ニ受命判事又ハ受託  
判事ノ命令ニ之ヲ準用ス  
言渡ヲ爲サ、ル裁判所ノ決定及ヒ言渡ヲ爲サ、ル裁判長并  
ニ受命判事又ハ受託判事ノ命令ハ職權ヲ以テ之ヲ當事者ニ  
送達ス可シ

第三節 闕席判決

第二百四十七條 原告若クハ被告口頭辯論ノ期日ニ出頭セサ  
ル場合ニ於テハ出頭シタル相手方ノ申立ニ因リ闕席判決ヲ



爲ス

第二百四十八條 出頭セサル一方カ原告ナルキハ裁判所ハ闕席判決ヲ以テ其訴ノ却下ヲ言渡ス可シ

第二百四十九條 出頭セサル一方カ被告ナルキハ裁判所ハ被告カ原告ノ事實上ノ口頭供述ヲ自白シタルモノト看做シ原告ノ供述ニ因リ其請求ヲ正當ト爲スキハ闕席判決ヲ以テ被告ノ敗訴ヲ言渡シ又其請求ヲ正當ト爲サ、ルキハ其訴ノ却下ヲ言渡ス可シ

第二百五十條 延期シタル口頭辯論ノ期日又ハ證據決定ヲ爲スノ前若クハ後ニ於テ口頭辯論ヲ續行スル爲メニ定ムル期日モ亦第二百四十七條ノ辯論期日ト看做ス

第二百五十一條 原告若クハ被告出頭スルモ辯論ヲ爲サ、ルキ又ハ辯論ヲ爲サスシテ任意ニ退廷シタルキハ出頭セサル

モノト看做ス

第二百五十二條 原告若クハ被告各箇ノ事實證書又ハ發問ニ付キ陳述ヲ爲サス又ハ任意ニ退廷スルモ辯論ヲ爲シタルキハ本節ノ規定ヲ適用セス

第二百五十三條 左ノ場合ニ於テハ闕席判決ノ申立ヲ却下ス可キモノトス然レモ出頭シタル原告若クハ被告ハ口頭辯論ノ延期ヲ申立ツルヲ得

第一 出頭シタル原告若クハ被告カ裁判所ノ職權上調査ス可キ情況ニ付キ必要ナル證明ヲ爲ス能ハサルキ

第二 出頭セサル原告若クハ被告ニ口頭上事實ノ供述又ハ申立ヲ適當ナル時期ニ書面ヲ以テ通知セサルキ

辯論ヲ延期シタルキハ出頭セサル原告若クハ被告ヲ新期日ニ呼出ス可シ



第二百五十四條 闕席判決ノ申立ヲ却下スル決定ニ對シテハ  
即時抗告ヲ爲スヲ得又其決定ヲ取消シタルキハ出頭セサ  
リシ原告若クハ被告ヲ新期日ニ呼出ス可カラヌ

第二百五十五條 裁判所ハ左ノ場合ニ於テハ職權ヲ以テ闕席  
判決ノ申立ニ付テノ辯論ヲ延期スルヲ得

第一 出頭セサル原告若クハ被告カ合式ニ呼出サレサリ

シキ

第二 出頭セサル原告若クハ被告カ天災其他避ク可カラ

サル事變ノ爲メニ出頭スル能ハサルコトノ眞實ト認ム可

キ情況アルキ

出頭セサリシ原告若クハ被告ハ新期日ニ之ヲ呼出ス可シ

第二百五十六條 闕席判決ヲ受ケタル原告若クハ被告ハ其判  
決ニ對シ故障ヲ申立ツルコトヲ得

故障申立ノ期間ハ十四日トス此期間ハ不變期間ニシテ闕席  
判決ノ送達ヲ以テ始マル

故障申立ハ判決ノ送達前ト雖モ之ヲ爲スヲ得

外國ニ於テ送達ヲ爲ス可キキ又ハ公ノ告示ヲ以テ之ヲ爲ス

可キキハ裁判所ハ闕席判決ニ於テ故障期間ヲ定メ又ハ後日

口頭辯論ヲ經スシテ爲スヲ得ヘキ決定ヲ以テ之ヲ定ム

第二百五十七條 故障申立ハ闕席判決ヲ爲シタル裁判所ニ書

面ヲ差出シテ之ヲ爲ス

其書面ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一 故障ヲ申立テラレタル闕席判決

第二 其判決ニ對スル故障ノ申立

其書面ニハ本案ニ付テノ口頭辯論準備ノ爲メニ必要ナル事

項ヲモ掲ク可シ



第二百五十八條 判然許ス可カラサル故障又ハ判然法律上ノ方式ニ適セス若クハ其期間ノ經過後ニ起シタル故障ハ訴訟指揮上ノ命令ヲ以テ之ヲ却下ス可シ

此却下ノ命令ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スヲ得

第二百五十九條 前條ノ場合ヲ除クノ外裁判所ハ故障申立ノ書面ヲ相手方ニ送達シ且故障ニ付キ口頭辯論ノ新期日ヲ定メ當事者ノ雙方ヲ呼出ス可シ

第二百六十條 裁判所ハ職權ヲ以テ故障ヲ許ス可キヤ否又法律上ノ方式ニ從ヒ若クハ其期間ニ於テ故障ヲ申立テタルヤ否ヲ調査ス可シ  
若シ此要件ノ一ヲ缺クハ判決ヲ以テ故障ヲ不適法トシテ棄却ス

第二百六十一條 故障ヲ適法トスルハ訴訟ハ闕席前ノ程度

ニ復ス

第二百六十二條 新辯論ニ基キ爲ス可キ判決カ闕席判決ト符合スルハ闕席判決ヲ維持スルヲ言渡シ其符合セサル場合ニ於テハ新判決ニ於テ闕席判決ヲ廢棄ス

第二百六十三條 法律ニ從ヒ闕席判決ヲ爲シタルハ闕席ニ因テ生シタル費用ハ相手方ノ不當ナル異議ニ因リ生セサルモノニ限り故障ノ爲メ闕席判決ヲ變更スル場合ニ於テモ其闕席シタル原告若クハ被告ニ之ヲ負擔セシム

第二百六十四條 故障ヲ申立テタル原告若クハ被告口頭辯論ノ期日又ハ辯論延期ノ期日ニ出頭セサルハ第二百五十三條及ヒ第二百五十五條ニ規定シタル場合ヲ除クノ外出頭シタル相手方ノ申立ニ因リ故障ヲ棄却スル新闕席判決ヲ言渡ス



新闕席判決ニ對シテハ故障ヲ申立ツルヲ得ス

第二百六十五條 故障ノ拋棄及ヒ其取下ニ付テハ控訴ノ拋棄及ヒ其取下ニ付テノ規定ヲ準用ス

第二百六十六條 本節ノ規定ハ反訴又ハ既ニ原因ノ確定シタル請求ノ數額ノ定テ目的物トスル訴訟手續ニ之ヲ準用ス  
中間訴訟ノ辯論ノ爲メ期日ヲ定メタルキハ其闕席訴訟手續及ヒ闕席判決ハ其中間訴訟ヲ完結スルニ止マリ且本節ノ規定ヲ之ニ準用ス

第四節 計算事件、財産分別及ヒ此ニ類スル訴訟ノ準備手續

第二百六十七條 計算ノ當否、財産ノ分別又ハ此ニ類スル關係ヲ目的トスル訴訟ニ於テ計算書又ハ財産目錄ニ對シ許多ノ爭アル請求ノ生シ又ハ許多ノ爭アル異議ノ生シタルキハ受

訴裁判所ハ受命判事ノ面前ニ於ケル準備手續ヲ命スルヲ得

第二百六十八條 準備手續ヲ命スル決定ヲ言渡スニ際シ裁判長ハ受命判事ヲ指定シ決定施行ノ期日ヲ定ム可シ若シ裁判長此期日ヲ定メサルキハ受命判事之ヲ定ム又受命判事其委任ヲ施行スルニ差支アルキハ裁判長更ニ他ノ判事ヲ任ス  
第二百六十九條 準備手續ニ於テハ調書ヲ以テ左ノ諸件ヲ明確ニス可シ

第一 如何ナル請求ヲ爲スヤ及ヒ如何ナル攻撃、防禦ノ方法ヲ主張スルヤ

第二 如何ナル請求及ヒ如何ナル攻撃、防禦ノ方法ヲ爭フヤ又ハ之ヲ爭ハサルヤ

第三 爭ト爲リタル請求及ヒ爭ト爲リタル攻撃、防禦ノ方



法ニ付テハ其事實上ノ關係及ヒ當事者ノ表示シタル證據方法、主張シタル證據抗辯、證據方法并ニ證據抗辯ニ關シテ爲シタル陳述及ヒ提出シタル申立此手續ハ訴訟又ハ中間訴訟カ判決又ハ證據決定ヲ爲スニ熟スルマテ之ヲ續行ス可シ

第二百七十條 原告若クハ被告カ期日ニ於テ受命判事ノ面前ニ出頭セサルキハ受命判事ハ前條ノ規定ニ依リ調書ヲ以テ出頭シタル原告若クハ被告ノ提供ヲ明確ニシ且新期日ヲ定メ出頭セサル原告若クハ被告ニハ調書ノ謄本ヲ付與シテ新期日ニ之ヲ呼出ス可シ

原告若クハ被告カ新期日ニモ亦出頭セサルキハ送達セシ調書ニ掲ケタル相手方ノ事實上ノ主張ヲ自白シタリト看做シ其主張ニ付テノ準備手續ハ完結シタルモノトス

第二百七十一條 受訴裁判所ハ準備手續ノ終結後ニ口頭辯論ノ期日ヲ定メ之ヲ當事者ニ通知ス可シ

第二百七十二條 當事者ハ口頭辯論ニ於テ準備手續ノ結果ヲ調書ニ基キ演述ス可シ

原告若クハ被告カ出頭セサルキハ準備手續ニ於テ爭ハサル請求ハ一分判決ヲ以テ之ヲ完結シ其他ニ付テハ申立ニ因テ闕席判決ヲ爲ス可シ

第二百七十三條 事實又ハ證書ニ付キ受命判事ノ面前ニ於テ陳述ヲ爲サス又ハ之ヲ拒ミタルキハ口頭辯論ニ於テ之ヲ追完スルヲ得ス

請求、攻撃若クハ防禦ノ方法、證據方法及ヒ證據抗辯ニシテ受命判事ノ調書ヲ以テ之ヲ明確ニセサルモノニ付テハ後日ニ至リ始メテ生シ又ハ後日ニ至リ始メテ原告若クハ被告ノ知



リタルヲテ疏明スルキニ限り口頭辯論ニ於テ之ヲ主張スル  
ヲテ得

### 第五節 證據調ノ總則

第二百七十四條 證據調ハ受訴裁判所ニ於テ之ヲ爲スヲ通例  
トス

證據調ハ此法律ニ定メタル場合ニ限り受訴裁判所ノ部員一  
名ニ之ヲ命シ又ハ區裁判所ニ之ヲ囑託スルヲ得

證據調ヲ命スル決定ニ對シテハ不服ヲ申立ツルヲ得ス

第二百七十五條 當事者ノ申立テタル數多ノ證據中其調フ可  
キ限度ハ裁判所之ヲ定ム

當事者ノ演述ニ引續キ直チニ證據調ヲ爲サシテ受訴裁判  
所ニ於テ新期日ニ之ヲ爲シ又ハ受命判事若クハ受託判事ノ  
面前ニ於テ之ヲ爲ス可キハ證據決定ニ因リ之ヲ命ス可シ

第二百七十六條 證據調ニ付キ不定時間ノ障碍アルキハ申立

ニ因リ相當ノ期間ヲ定ム可シ此期間ヲ徒過セシムルモ訴訟  
手續ヲ遲滞セシメサル限りハ其證據方法ヲ用井ルヲ得

第二百七十七條 證據決定ニハ左ノ諸件ヲ具備ス可シ

第一 證ス可キ係爭事實

第二 證據方法殊ニ證人又ハ鑑定人ヲ訊問ス可キハ其  
氏名、身分、職業及ヒ住所

第三 證據方法ヲ申出テタル原告若クハ被告ノ氏名

第二百七十八條 證據決定ノ變更ハ其決定ノ施行完結前ニ在  
テハ原告若クハ被告ヨリ以前ノ辯論ニ基キ之ヲ申立ツルヲ  
得ス

證據決定ノ施行ハ職權ヲ以テ之ヲ爲ス

第二百七十九條 受訴裁判所ノ部員カ證據調ヲ爲ス可キハ



裁判長證據決定言渡ノ際受命判事ヲ指名シ且證據調ノ期日ヲ定ム若シ其期日ヲ定メサルキハ受命判事之ヲ定ム受命判事其命ヲ施行スルニ差支アルキハ裁判長更ニ他ノ部員ヲ命ス

第二百八十條 他ノ裁判所ニ於テ證據調ヲ爲ス可キキハ裁判長ハ其囑託書ヲ發ス可シ

證據調ニ關スル書類ハ原本ヲ以テ受託判事ヨリ受訴裁判所書記ニ之ヲ送致シ其書記ハ之ヲ受領シタルヲ當事者ニ通知ス可シ

第二百八十一條 受命判事又ハ受託判事カ證據調ノ期日ヲ定メタルキハ其期日及ヒ場所ヲ當事者ニ通知ス可シ

第二百八十二條 外國ニ於テ爲ス可キ證據調ハ外國ノ管轄官廳又ハ其國駐在ノ帝國ノ公使若クハ領事ニ囑託シテ之ヲ爲

ス其囑託ニ付テハ第五百五十三條及ヒ第五百五十六條ノ現定ヲ準用ス

第二百八十三條 受命判事又ハ受託判事ハ他ノ裁判所ニ於テ證據調ヲ爲ス可キノ至當ナル原因ノ爾後ニ生シタルキハ其裁判所ニ證據調ヲ囑託スルノ權ヲ有ス此命令ハ當事者ニ之ヲ通知ス可シ

第二百八十四條 受命判事又ハ受託判事ノ面前ニ於テ證據調ノ際ニ爭ヲ生シ其爭ノ完結スルニ非サレハ證據調ヲ續行スルヲ得ス且其判事之ヲ裁判スルノ權ナキキハ其完結ハ受訴裁判所之ヲ爲ス

第二百八十五條 當事者ノ一方又ハ雙方證據調ノ期日ニ出頭セサルキハ事件ノ程度ニ因リ爲シ得ヘキ限リハ證據調ヲ爲ス可シ



第二百八十六條 裁判所ハ事件ノ未ダ判決ヲ爲スニ熟セスト認ムルキハ證據調ノ補充ヲ決定スルコトヲ得原告若クハ被告ノ出頭セサルカ爲メニ證據調ノ全部又ハ一分ヲ爲スコトヲ得サル場合ニ於テハ其追完又ハ補充ハ此カ爲メ訴訟手續ノ遲滯セサルキ又ハ舉證者其過失ニ非スシテ前期日ニ出頭スル能ハサリシコトヲ疏明スルキニ限り判決ニ接著スル口頭辯論ノ終結ニ至ルマテ申立ニ因リ之ヲ命ス

第二百八十七條 證據調又ハ其續行ノ爲メ新期日ヲ定ムルノ必要アルキハ舉證者又ハ當事者雙方前期日ニ出頭セサリシキト雖モ職權ヲ以テ之ヲ定ム

第二百八十八條 受訴裁判所ニ於テ證據調ヲ爲スキハ其期日ハ同時ニ口頭辯論ヲ續行スルノ期日ナリトス

受命判事又ハ受託判事ノ面前ニ於テ證據調ヲ爲ス可キコトヲ

命シタルキハ其證據決定中ニ併セテ受訴裁判所ニ於ケル口頭辯論續行ノ期日ヲ定ムルコトヲ得若シ之ヲ定メサルキハ證據調ノ終結後職權ヲ以テ其期日ヲ定メ之ヲ當事者ニ通知ス可シ

第二百八十九條 裁判所ハ相當ノ期間ヲ定メ證據調ノ費用ヲ舉證者ヨリ豫納セシムルコトヲ得若シ其期間内ニ豫納セサルキハ證據調ヲ爲サス但期間ノ滿了後ト雖モ豫納シタルキハ訴訟手續ノ遲滯ヲ生セサル場合ニ限り證據調ヲ許ス

#### 第六節 人證

第二百九十條 何人ヲ問ハス法律ニ別段ノ規定ナキ限りハ民事訴訟ニ關シ裁判所ニ於テ證言スルノ義務アリ

第二百九十一條 公ノ吏員ハ退職ノ後ト雖モ其職務上默秘ス可キ義務アル情況ニ付テハ其所屬廳又ハ其最後ノ所屬廳ノ



許可ヲ得タルキニ限り證人トシテ之ヲ訊問スルコトヲ得大臣  
ニ付テハ勅許ヲ得ルコトヲ要ス

此許可ハ證言カ國家ノ安寧ヲ害スルノ恐アルキニ限り之ヲ  
拒ムコトヲ得

右許可ハ受訴裁判所ヨリ之ヲ求メ且證人ニ之ヲ通知ス可シ  
第二百九十二條 人證ノ申出ハ證人ヲ指名シ及ヒ證人ノ訊問

ヲ受ク可キ事實ヲ表示シテ之ヲ爲ス

第二百九十三條 證人ノ呼出狀ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ  
要ス

- 第一 證人及ヒ當事者ノ表示
- 第二 證據決定ノ旨趣ニ依リ訊問ヲ爲ス可キ事實
- 第三 證人ノ出頭ス可キ場所及ヒ期日
- 第四 出頭セサルキハ法律ニ依リ處罰ス可キ旨

### 第五 裁判所ノ名稱

第二百九十四條 豫備後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人、軍屬ヲ證人  
トシテ呼出スニハ其所屬ノ長官又ハ隊長ニ囑託シテ之ヲ爲  
ス其長官又ハ隊長ハ期日ヲ遵守セシムル爲メニ證人ノ闕勤  
ヲ許ス可シ若シ軍務上之ヲ許ス能ハサルキハ其旨ヲ裁判所  
ニ通知シ且他ノ期日ヲ定ムルノ囑託ヲ爲スノ義務アリ

第二百九十五條 合式ニ呼出サレタル證人ニシテ正當ノ理由  
ナク出頭セサル者ニ對シテハ申立ナシト雖モ決定ヲ以テ其  
不參ニ因リ生シタル費用ノ賠償及ヒ二十圓以下ノ罰金ヲ言  
渡ス可シ

證人カ再度出頭セサル場合ニ於テハ更ニ費用ノ賠償及ヒ罰  
金ヲ言渡ス可シ又其勾引ヲ命スルコトヲ得  
證人ハ右ノ決定ニ對シテ抗告ヲ爲スコトヲ得此抗告ハ執行ヲ



停止スルノ効力ヲ有ス

豫備後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人軍屬ニ對スル罰金ノ言渡及  
ヒ執行ハ軍事裁判所又ハ所屬ノ長官又ハ隊長ニ囑託シテ之  
ヲ爲ス其勾引ニ付テモ亦同シ

第二百九十六條 證人其出頭セザリシトナ後日ニ正當ノ理由  
ヲ以テ辯解スルキハ罰金及ヒ賠償ノ決定ヲ取消ス可シ  
證人ノ不參屆及ヒ決定取消ノ申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之  
ヲ爲ストナ得

第二百九十七條 皇族證人ナルキハ受命判事又ハ受託判事其  
所在ニ就キ訊問ヲ爲ス  
所在ニ就キ訊問ヲ爲ス  
各大臣ニ付テハ其官廳ノ所在地ニ於テ之ヲ訊問ス若シ其所  
在地外ニ滞在スルキハ其現在地ニ於テ之ヲ訊問ス  
帝國議會ノ議員ニ付テハ開會期間其議會ノ所在地ニ滞在中

ハ其所在地ニ於テ之ヲ訊問ス

第二百九十八條 左ニ掲クル者ハ證言ヲ拒ムトナ得

第一 原告若クハ被告又ハ其配偶者ト親族ナルキ但姻族  
ニ付テハ婚姻ノ解除シタルキト雖モ亦同シ

第二 原告若クハ被告ノ後見ヲ受クル者

第三 原告若クハ被告ト同居スル者又ハ雇人トシテ之ニ  
仕フル者

裁判長ハ訊問前ニ前項ノ者ニ證言ヲ拒ムノ權利アル旨ヲ告  
ク可シ

第二百九十九條 左ノ場合ニ於テハ證言ヲ拒ムトナ得

第一 公ノ吏員又ハ公ノ吏員タリシ者カ其職務上黙秘ス  
可キ義務アル情况ニ關スルキ

第二 醫師、藥商、穩婆、辯護士、公證人、神職及ヒ僧侶カ其身分



又ハ職業ノ爲メ委託ヲ受ケタルニ因テ知りタル事實ニシテ黙秘ス可キモノニ關スルキ

第三 問ニ付テノ答辯カ證人又ハ前條ニ掲ケタル者ノ耻辱ニ歸スルカ又ハ其刑事上ノ訴追ヲ招クノ恐アルキ

第四 問ニ付テノ答辯カ證人又ハ前條ニ掲ケタル者ノ爲メ直接ニ財産權上ノ損害ヲ生セシム可キキ

第五 證人カ其技術又ハ職業ノ秘密ヲ公ニスルニ非サレハ答辯スルヲ能ハサルキ

第三百條 證人ハ第二百九十八條第一號及ヒ第二百九十九條第四號ノ場合ニ於テ左ノ事項ニ付キ證言ヲ拒ムヲ得ス

第一 家族ノ出產、婚姻又ハ死亡

第二 家屬ノ關係ニ因リ生スル財産事件ニ關スル事實

第三 證人トシテ立會ヒタル場合ニ於ケル權利行爲ノ成

立及ヒ旨趣

第四 原告若クハ被告ノ前主又ハ代理人トシテ係争ノ權利關係ニ關シ爲シタル行爲

前條第一號、第二號ニ掲ケタル者其黙秘ス可キ義務ヲ免除セラレタルキハ證言ヲ拒ムヲ得ス

第三百一條 證言ヲ拒ム證人ハ其訊問ノ期日前ニ書面又ハ口頭ヲ以テ又ハ期日ニ於テ其拒絕ノ原因タル事實ヲ開示シ且之ヲ疏明ス可シ

原因ヲ疏明シテ證言ヲ拒ミタル證人ハ期日ニ出頭スルノ義務ナシ

裁判所書記ハ拒絕ノ書面ヲ受領シ又ハ其陳述ニ付キ調書ヲ作りタルキハ之ヲ當事者ニ通知ス可シ

第三百二條 拒絕ノ當否ニ付テハ受訴裁判所當事者ヲ審訊シ



タル後決定ヲ以テ其裁判ヲ爲ス但第二百九十九條第一號ノ場合ニ於テ爲シタル拒絕ノ當否ニ付テハ所屬廳又ハ最後ノ所屬廳ノ裁定ニ任ス  
原告若クハ被告カ出頭セサルキハ出頭シタル者ノ申述ヲ斟酌シテ決定ヲ爲ス  
右決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得此抗告ハ執行ヲ停止スルノ効力ヲ有ス

第三百三條 原因ヲ開示セスシテ證言ヲ拒ミ又ハ開示シタル原因ノ棄却確定シタル後ニ之ヲ拒ミタルキハ申立ヲ要セスシテ決定ヲ以テ證人ニ對シ其拒絕ニ因テ生シタル費用ノ賠償及ヒ四十圓以下ノ罰金ヲ言渡ス  
證人ハ費用ノ賠償及ヒ罰金ノ言渡ニ對シ抗告ヲ爲スコトヲ得此抗告ハ執行ヲ停止スルノ効力ヲ有ス

軍人軍屬ニ對スル罰金ノ言渡及ヒ執行ハ軍事裁判所ニ囑託シテ之ヲ爲ス

第三百四條 原告若クハ被告ハ相手方ト相手方ノ證人トノ間ニ第二百九十八條第一號乃至第三號ノ關係アルキハ其證人ヲ忌避スルコトヲ得

第三百五條 忌避ノ申請ハ證人ノ訊問前ニ之ヲ爲ス可シ此時限後ハ其前ニ忌避ノ原因ヲ主張スルヲ得サリシコトヲ疏明スルキニ限り其證人ヲ忌避スルコトヲ得

忌避ノ申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得  
忌避ノ原因ハ之ヲ疏明ス可シ  
第三百六條 忌避ノ申請ニ付テノ裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得

忌避ノ原因アリト宣言スル決定ニ對シテハ上訴ヲ爲スコトヲ



得ス忌避ノ原因ナシト宣言スル決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲ス可キ得

第三百七條 各證人ニハ其携帶ス可キ呼出狀其他適當ノ方法ヲ以テ人違ナラサルコトヲ判然ナラシメタル後訊問前各別ニ宣誓ヲ爲サシム可シ然レモ宣誓ハ特別ノ原因アルキ殊ニ其許否ニ付キ疑ノ存スルキハ訊問ノ終ルマテ之ヲ延フルコトヲ得

第三百八條 證人ハ訊問前ニ宣誓ヲ爲ス可キ場合ニ於テハ良心ニ從ヒ眞實ヲ述ヘ何事ヲモ默秘セス又何事ヲモ附加セサル旨ノ誓ヲ宣フ可シ又訊問後ニ宣誓ヲ爲ス可キ場合ニ於テハ良心ニ從ヒ眞實ヲ述ヘ何事ヲモ默秘セス又何事ヲモ附加セサル旨ノ誓ヲ宣フ可シ

第三百九條 判事ハ宣誓前ニ相當ナル方法ヲ以テ宣誓者ニ偽證ノ罰ヲ諭示ス可シ

第三百十條 宣誓ヲ拒ム證人ニ付テハ第三百一條乃至第三百三條ノ規定ヲ適用ス

第三百十一條 左ノ者ハ宣誓ヲ爲サシメスシテ參考ノ爲メ之ヲ訊問スルコトヲ得

第一 訊問ノ時未タ滿十六歳ニ達セサル者

第二 宣誓ノ何物タルヤヲ了解スルニ必要ナル精神上ノ發達ノ缺クル者

第三 刑事上ノ判決ニ因リ公權ヲ剝奪又ハ停止セラレタル者

第四 第二百九十八條及ヒ第二百九十九條ノ第三號并ニ第四號ノ規定ニ依リ證言ヲ拒絕スルノ權利アリテ之ヲ



行使セサル者但第二百九十九條第三號并ニ第四號ノ場  
合ニ於テハ拒絕ノ權利ニ關スル事實ニ付キ證言ヲ爲ス  
可キトテ申立テラレタルキニ限ル

第五 訴訟ノ成績ニ直接ノ利害關係ヲ有スル者

第三百十二條 證人訊問ハ後ニ訊問ス可キ證人ノ在ラサル場  
所ニ於テ各別ニ之ヲ爲ス

證人互ニ齟齬シタル供述ヲ爲スキハ之ヲ對質セシムルトテ  
得

第三百十三條 證人訊問ハ證人ニ其氏名、年齢、身分、職業及ヒ住  
居ヲ問フヲ以テ始マル又必要ナル場合ニ於テハ其事件ニ於  
テ證言ノ信用ニ關スル情況殊ニ當事者トノ關係ニ付テノ問  
ヲ爲ス可シ

第三百十四條 證人ニハ其訊問事項ニ付キ知りタルモノヲ牽

連シテ供述セシム可シ

證人ノ供述ヲ明白及ヒ完全ナラシメ且其知りタル原因ヲ穿  
鑿スル爲メ必要ナル場合ニ於テハ尙ホ他ノ問ヲ發ス可シ

第三百十五條 證人ハ其供述ノ稿本ヲ朗讀シ其他覺書ヲ用井  
ルトテ得ス但算數ノ關係ニ限り覺書ヲ用井ルトテ得

第三百十六條 陪席判事ハ裁判長ニ告ケテ證人ニ問ヲ發スル  
トテ得

當事者ハ證人ニ對シ自ラ問ヲ發スルトテ得ス然レモ當事者  
ハ證人ノ供述ヲ明白ナラシムル爲メニ其必要ナリトスル問  
ヲ發セントテ裁判長ニ申立ツルトテ得

發問ノ許否ニ付キ異議アルキハ裁判所ハ直チニ之ヲ裁判ス  
第三百十七條 調書ニハ證人カ其訊問ノ前若クハ後ニ宣誓シ  
タルヤ又ハ宣誓セスシテ訊問ヲ受ケタルヤヲ記載ス可シ



第三百十八條 受訴裁判所ハ左ノ場合ニ於テ證人ノ再訊問ヲ命スルヲ得

第一 證人訊問カ法律上ノ規定ニ違ヒタルキ

第二 證人訊問ノ完全ナラサルキ

第三 證人ノ供述カ明白ナラス又ハ兩義ニ涉ルキ

第四 證人カ其供述ノ補充又ハ更正ヲ申立ツルキ

第五 其他裁判所カ再訊問ヲ必要トスルキ

第三百十九條 左ノ場合ニ於テ證人ニ依レル證據調ハ受訴裁判所ノ部員一名ニ之ヲ命シ又ハ區裁判所ニ之ヲ囑託スルヲ得

第一 眞實ヲ探知スル爲メニ現場ニ就キ證人ヲ訊問スルノ必要ナルキ

第二 證人カ疾病其他ノ事由ノ爲メ受訴裁判所ニ出頭ス

ル能ハサルキ

第三 證人カ受訴裁判所ノ所在地ヨリ遠隔ノ地ニ在テ其裁判所ニ出頭スルニ付キ不相應ノ時日及ヒ費用ヲ要スルキ

第三百二十條 第二百九十五條、第二百九十六條、第三百三條及ヒ第三百十條ニ掲ケタル證人ニ對スル受訴裁判所ノ權ハ受命判事又ハ受託判事ニモ屬ス

證人カ受命判事又ハ受託判事ノ面前ニ於テ理由ヲ開示シテ證言ヲ拒ミ又ハ宣誓ヲ拒ミ又ハ職權若クハ申立ニ因リ發シタル問ニ答フルヲ拒ムキハ此拒絕ノ當否ニ付キ裁判ヲ爲スノ權ハ受訴裁判所ニ屬ス

受命判事又ハ受託判事カ原告若クハ被告ヨリ申立テタル問ヲ發スルヲ否ムキハ原告若クハ被告ハ其當否ニ付キ受訴



裁判所ノ裁判ヲ求ムルヲ得

證人ノ再訊問ハ受命判事又ハ受託判事ノ意見ヲ以テ之ヲ命  
スルヲ得

第三百二十一條 證人ヲ申出テタル原告若クハ被告ハ其訊問  
ノ開始マテハ此證據方法ヲ拋棄スルヲ得其後ハ相手方ノ  
承諾ヲ得ルキニ限り之ヲ拋棄スルヲ得

第三百二十二條 各證人ハ日當ノ辨濟及ヒ其出頭ノ爲メニ旅  
行ヲ要スルキハ旅費ノ辨濟ヲ請求スルヲ得

其金額ノ拂渡ハ訊問期日ノ終リタル後直チニ之ヲ求ムル  
ヲ得

舉證者ノ豫納シタル金額不足スルキハ職權ヲ以テ其不足額  
ヲ取立ツ可シ

### 第七節 鑑定

第三百二十三條 鑑定ニ付テハ以下數條ニ於テ別段ノ規定ヲ

設ケサル限りハ人證ニ付テノ規定ヲ準用ス

第三百二十四條 鑑定ニ因テ證據ヲ舉ケントスル原告若クハ

被告ハ鑑定ス可キ事項ヲ申立ツ可シ

第三百二十五條 立會フ可キ鑑定人ノ選定及ヒ其員數ノ指定

ハ受訴裁判所之ヲ爲ス其裁判所ハ鑑定人ノ任命ヲ一名ニ制  
限シ又ハ何時ニテモ既ニ任命シタル者ニ代ヘ他ノ鑑定人ヲ  
任命スルヲ得

裁判所ハ鑑定人トシテ訊問ヲ受クルニ適當ナル者ヲ指名ス  
可キ旨ヲ當事者ニ催告スルヲ得

當事者カ一定ノ者ヲ鑑定人ニ爲スヲ合意シタルキハ裁判  
所ハ其合意ニ從フ可シ然レモ裁判所ハ當事者ノ爲ス可キ選  
定ヲ一定ノ員數ニ制限スルヲ得



第三百二十六條 外國ノ書類又ハ產物ノ審査ヲ要スル場合ニ於テ必要ナル能力ヲ有スル本邦人ノ在ラサルキハ裁判所ハ此事項ニ付キ當事者ヲ審訊シタル後外國人ヲ鑑定人ニ任命スルコトヲ得

第三百二十七條 左ニ掲クル者鑑定ヲ命セラレタルキハ之ヲ爲スノ義務アリ

第一 必要ナル種類ノ鑑定ヲ爲ス爲メニ公ニ任命セラレタル者

第二 鑑定ヲ爲スニ必要ナル學術、技藝若クハ職業ヲ常務トシテ從事スル者又ハ學術、技藝若クハ職業ニ從事スル爲メニ公ニ任命セラレ若クハ委任セラレタル者

第三百二十八條 鑑定人ハ證人カ證言ヲ拒ムコトヲ得ルト同一ノ原因ニ依リ鑑定ヲ拒ムノ權利アリ

公ノ吏員ハ其所屬廳ニ於テ異議アルキハ之ヲ鑑定人トシテ訊問スルコトヲ得ス

鑑定ヲ爲ス可キ旨ヲ裁判所ニ於テ述ヘタル者ハ鑑定人タルノ義務ナキト雖モ本條第一項ノ場合ヲ除クノ外鑑定ヲ爲スノ義務アリ

第三百二十九條 鑑定ヲ爲スノ義務アル鑑定人出頭セス又ハ鑑定ヲ拒ミタル場合ニ於テハ其者ニ對シ此カ爲メニ生シタル費用ノ賠償及ヒ罰金ヲ言渡ス可シ但其鑑定人ヲ勾引スルコトヲ得ス

第三百三十條 鑑定人ハ其鑑定ヲ爲ス前ニ其鑑定人タル義務ヲ公平且誠實ニ履行ス可キ旨ノ誓ヲ宣フ可シ

第三百三十一條 受訴裁判所ハ其意見ヲ以テ左ノ諸件ヲ定ム可シ



第一 鑑定ノ結果ハ口頭又ハ書面ニテ之ヲ述ヘシム可キ

ヤ

第二 數名ノ鑑定人ヲ訊問ス可キ場合ニ於テ各意見カ異ナルキハ共同ニテ鑑定書ヲ作ラシム可キヤ又ハ各別ニ之ヲ作ラシム可キヤ

第三 口頭辯論ノ際鑑定人ノ總員又ハ其一名ヲシテ鑑定書ヲ説明セシム可キヤ

第四 鑑定ノ結果カ不十分ナルキハ同一又ハ他ノ鑑定人ヲシテ再ヒ鑑定ヲ爲サシム可キヤ

第三百三十二條 受訴裁判所ハ鑑定人ノ任命ヲ受命判事又ハ受託判事ニ委任スルヲ得此場合ニ於テハ受命判事又ハ受託判事ハ第三百二十五條及ヒ第三百三十一條第一號并ニ第二號ノ規定ニ依リ受訴裁判所ニ屬スル權ヲ有ス

第三百三十三條 鑑定人ハ日當旅費及ヒ立替金ノ辨濟ヲ請求スルヲ得

此場合ニ於テハ第三百二十二條ノ規定ヲ準用ス

第三百三十四條 實驗ノ爲メ特別ノ智識ヲ要セシ過去ノ事實又ハ情況ヲ其智識アル者ノ訊問ニ因テ確定ス可キキハ人證ニ付テノ規定ヲ適用ス

#### 第八節 書證

第三百三十五條 書證ノ申出ハ證書ヲ提出シテ之ヲ爲ス

第三百三十六條 舉證者其使用セントスル證書カ相手方ノ手ニ存スル旨ヲ主張スルキハ書證ノ申出ハ相手方ニ其證書ノ提出ヲ命セントシテ申立テ、之ヲ爲ス可シ

第三百三十七條 相手方ハ左ノ場合ニ於テ證書ヲ提出スルノ義務アリ



第一 舉證者カ民法ノ規定ニ從ヒ訴訟外ニ於テモ證書ノ

引渡又ハ其提出ヲ求ムルヲ得ルキ

第二 證書カ其旨趣ニ因リ舉證者及ヒ相手方ニ共通ナル

キ

第三百三十八條 相手方ハ其手ニ存スル證書ニシテ其訴訟ニ

於テ舉證ノ爲メ引用シタルモノヲ提出スルノ義務アリ準備

書面中ニノミ引用シタルキト雖モ亦同シ

第三百三十九條 申立ニハ左ノ諸件ヲ具備ス可シ

第一 證書ノ表示

第二 證書ニ依リ證ス可キ事實

第三 證書ノ旨趣

第四 證書カ相手方ノ手ニ存スル旨ヲ主張スル理由タル

情況

第五 證書ヲ提出ス可キ義務ノ原因

第三百四十條 裁判所ハ證書ニ依リ證ス可キ事實ノ重要ニシ

テ且申立ヲ正當ナリト認ムル場合ニ於テ相手方カ證書ノ其

手ニ存スルヲ自白スルキ又ハ申立ニ對シ陳述セサルキハ

證據決定ヲ以テ證書ノ提出ヲ命ス

第三百四十一條 相手方カ證書ヲ所持セサル旨ヲ申立ツルキ

ハ此申立ノ眞實ナルヤ否ヲ定ムル爲メ又ハ證書ノ所在ヲ穿

鑿スル爲メ又ハ舉證者ノ使用ヲ妨クル目的ヲ以テ故意ニ證

書ヲ隱匿シ若クハ使用ニ耐ヘサラシメタルヤ否ヲ穿鑿スル

爲メ本章第十節ノ規定ニ從ヒ相手方本人ヲ訊問ス可シ

相手方カ官廳ナルキハ證書カ其官廳ノ保藏ニ係ラス又ハ其

所在ヲ開示スルヲ得サル旨ノ長官ノ證明書ヲ以テ訊問ニ換

フ裁判所ハ此證明書ヲ差出サシムル爲メ相當ノ期間ヲ定ム



可シ

第三百四十二條 證書ヲ所持スルコトヲ自白シ又ハ之ヲ所持セ  
スト申立テサル相手方カ其證書ヲ提出ス可シトノ命ニ從ハ  
ス又ハ相手方カ所持セスト申立テタル證書ニ付キ訊問ヲ受  
ケテ供述ヲ爲スコトヲ拒ミタルキ又ハ舉證者ノ使用ヲ妨クル  
目的ヲ以テ故意ニ證書ヲ隱匿シ若クハ使用ニ耐ヘサラシメ  
タルコトノ明確ナルキハ舉證者ノ差出シタル證書ノ謄本ヲ正  
當ナルモノト看做ス若シ謄本ヲ差出サ、ルキハ裁判所ハ其  
意見ヲ以テ證書ノ性質及ヒ旨趣ニ付キ舉證者ノ主張ヲ正當  
ナリト認ムルコトヲ得

前條第二項ニ掲ケタル證明書ヲ裁判所ノ定メタル期間内ニ  
差出サ、ルキハ相手方タル官廳ニ對シ前項ト同一ノ結果ヲ  
生ス

第三百四十三條 舉證者其使用セントスル證書カ第三者ノ手  
ニ存スル旨ヲ主張スルキハ書證ノ申出ハ其證書ヲ取寄スル  
爲メノ期間ヲ定メンコトヲ申立テ、之ヲ爲ス

第三百四十四條 第三者ハ舉證者ノ相手方ニ於ケルト同一ナ  
ル理由ニ因リ證書ヲ提出スルノ義務アリ然レモ強テ證書ヲ  
提出セシムルコトハ訴ヲ以テノミ之ヲ爲スコトヲ得

第三百四十五條 第三百四十三條ニ從ヒ爲ス可キ申立ヲ辯明  
スルニハ第三百三十九條第一號乃至第三號及ヒ第五號ノ要  
件ヲ履ミ且證書カ第三者ノ手ニ存スルコトヲ疏明ス可シ

第三百四十六條 證書ニ依リ證ス可キ事實ノ重要ニシテ且其  
申立カ前條ノ規定ニ適スルキハ裁判所ハ證書提出ノ期間ヲ  
定ム可シ

第三百者ニ對スル訴訟ノ完結シタルキ又ハ舉證者カ訴ノ提起



訴訟ノ繼續又ハ強制執行ヲ遲延シタルキハ相手方ハ前項ノ期間ノ滿了前ニ訴訟手續ノ繼續ヲ申立ツルヲ得

第三百四十七條 舉證者其使用セントスル證書カ官廳又ハ公吏ノ手ニ存スル旨ヲ主張スルキハ書證ノ申出ハ證書ノ送付ヲ官廳又ハ公吏ニ囑託セラレシテ申立テ、之ヲ爲ス

此規定ハ當事者カ法律上ノ規定ニ從ヒ裁判所ノ助力ナクシテ取寄スルヲ得ヘキ證書ニハ之ヲ適用セス

官廳又ハ公吏カ第三百三十七條ノ規定ニ基キ證書ヲ提出スルノ義務アル場合ニ於テ其送付ヲ拒ムキハ第三百四十三條乃至第三百四十六條ノ規定ヲ適用ス

第三百四十八條 證據決定ヲ爲シタル後其決定中ニ掲ケタル係爭事實ニ付キ第三百四十三條及ヒ第三百四十七條ノ規定ニ從ヒ書證ヲ申出テタル場合ニ於テ證書ノ取寄ニ必要ナル

手續ノ爲メニ訴訟ノ完結ヲ遲延スルニ至ル可ク且裁判所ニ於テ原告若クハ被告カ訴訟ヲ遲延スルノ故意ヲ以テ又ハ甚シキ怠慢ニ因リ書證ヲ早ク申出テサリシトノ心證ヲ得タルキハ申立ニ因リ其書證ノ申出ヲ却下スルヲ得

第三百四十九條 口頭辯論ノ際證書ヲ提出スルニ於テハ其毀損若クハ紛失ノ恐アリ又ハ他ノ顯著ナル障碍アルキハ受命判事又ハ受託判事ノ面前ニ證書ヲ提出ス可キ旨ヲ命スルヲ得

受命判事又ハ受託判事ハ證書ノ明細書及ヒ其謄本ヲ調書ニ添附シ又證書ノ一分ノミ必要ナルキハ第八條第二項ノ規定ニ從ヒ作りタル抄本ヲ之ニ添附ス可シ

第三百五十條 公正證書ハ正本又ハ認證ヲ受ケタル謄本ヲ以テ之ヲ提出スルヲ得然レモ裁判所ハ舉證者ニ正本ノ提出



ヲ命スルヲ得

私署證書ハ原本ヲ以テ之ヲ提出ス可シ若シ當事者カ未タ提出セサル原本ノ真正ニ付キ一致シ只其證書ノ効力又ハ解釋ニ付テノミ爭ヲ爲スルハ謄本ヲ提出スルヲ以テ足ル然レモ裁判所ハ職權ヲ以テ舉證者ニ原本ノ提出ヲ命スルヲ得提出シタル謄本ニ換ヘテ正本又ハ原本ヲ提出ス可キ旨ノ命ニ從ハサルルキハ裁判所ハ心證ヲ以テ謄本ニ如何ナル證據力ヲ付ス可キヤヲ裁判ス

第三百五十一條 舉證者ハ證書ヲ提出シタル後ハ相手方ノ承諾ヲ得ルルキニ限り此證據方法ヲ拋棄スルヲ得

第三百五十二條 公正證書又ハ檢眞ヲ經タル私署證書ヲ偽造若クハ變造ナリト主張スル者ハ其證書ノ眞否ヲ確定センコトノ申立ヲ爲ス可シ

此場合ニ於テハ裁判所ハ其證書ノ眞否ニ付キ中間判決ヲ以テ裁判ヲ爲ス可シ

第三百五十三條 私署證書ノ真正ニ付キ爭アルルキハ裁判所ハ舉證者ノ申立ニ因リ檢眞ヲ爲スヲ得

第三百五十四條 私署證書ノ檢眞ハ總テノ證據方法及ヒ手跡若クハ印章ノ對照ニ因テ之ヲ爲ス

證書ノ眞否ヲ證セントスル當事者ハ裁判所ノ定ムル期間内ニ手跡若クハ印章ヲ對照スル爲メニ適當ナル書類ヲ提出ス可シ

眞正ナリトノ自白又ハ證明アリタル適當ノ對照書類ナキハ對照ノ爲メ原告若クハ被告ニ對シ裁判所ニ於テ一定ノ語辭ノ手記ヲ命スルヲ得其手記シタル語辭ハ調書ノ附録トシテ之ニ添附ス可シ



裁判所ハ手跡若クハ印章ヲ對照シタル結果ニ付キ自由ナル  
心證ヲ以テ裁判ヲ爲シ又必用ナル場合ニ於テハ鑑定ヲ爲サ  
シメタル後之ヲ爲ス  
原告若クハ被告カ裁判所ノ定メタル期間内ニ對照書類ヲ提  
出セサルキ又ハ對照ス可キ語辭ヲ手記ス可キ裁判所ノ命ニ  
對シ十分ナル辯解ヲ爲サスシテ之ニ從ハサルキ又ハ書様ヲ  
變シテ手記シタルキハ證書ノ眞否ニ付テノ相手方ノ主張ハ  
其他ノ證據ヲ要セスシテ之ヲ眞正ナリト看做スヲ得  
第三百五十五條 提出シタル證書ハ直チニ之ヲ還付シ又適當  
ナル場合ニ於テハ其謄本ヲ記錄ニ留メテ之ヲ還付ス可シ  
然レモ證書ノ偽造又ハ變造ナリトノ争アルキハ檢事ノ意見  
ヲ聽キタル後ニ非サレハ之ヲ還付スルヲ得ス  
第三百五十六條 公正證書ノ眞正ナラサルヲ又ハ偽造若クハ

變造ナルヲ眞實ニ反キテ主張シタル原告若クハ被告ニ惡  
意若クハ重過失ノ責アルキハ五十圓以下ノ過料ヲ言渡ス  
又私署證書ノ眞正ナルヲ眞實ニ反キテ争フキハ前項ト同  
一ナル條件ヲ以テ二十圓以下ノ過料ヲ言渡ス  
第三百五十七條 本節ノ規定ハ事件ノ性質ニ於テ許ス限リハ  
事跡ノ紀念又ハ權利ノ證徴ノ爲メ作りタル割符、界標等ノ如  
キモノニモ之ヲ準用ス

#### 第九節 檢證

第三百五十八條 檢證ノ申出ハ檢證物ヲ表示シ及ヒ證ス可キ  
事實ヲ開示シテ之ヲ爲ス  
第三百五十九條 受訴裁判所ハ檢證ヲ爲スニ際シ鑑定人ノ立  
會ヲ命スルヲ得  
受訴裁判所ハ檢證及ヒ鑑定人ノ任命ヲ其部員一名ニ命シ又



ハ區裁判所ニ囑託スルヲ得

第三百六十條 檢證ヲ爲スノ際發見シタル事項ハ調書ニ記載シテ之ヲ明確ナラシメ又必要ナル場合ニ於テハ調書ノ附録トシテ添附ス可キ圖面ヲ作り之ヲ明確ナラシム可シ若シ既ニ記録ニ圖面ノ存スルキハ之ヲ檢證物ニ對照シ必要ナル場合ニ於テハ之ヲ更正ス可シ

第十節 當事者本人ノ訊問

第三百六十一條 當事者ノ提出シタル許ス可キ證據ヲ調ヘタル結果ニ因リ證ス可キ事實ノ眞否ニ付キ裁判所カ心證ヲ得ルニ足ラサルキハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ原告若クハ被告ノ本人ヲ訊問スルヲ得

第三百六十二條 裁判所ハ原告若クハ被告ヲ訊問スルヲ決定シ且原告若クハ被告ノ自身カ決定言渡ノ際在廷スルキハ

直ニ其訊問ヲ爲スヲ通例トス

第三百六十三條 訊問ヲ受クル原告若クハ被告ハ供述ノ稿本其他覺書ヲ以テ答辯ヲ爲スヲ得ス

第三百六十四條 原告若クハ被告カ十分ナル理由ナクシテ供述スルヲ拒ミ又ハ訊問期日ニ出頭セサルキハ裁判所ハ其意見ヲ以テ訊問ニ因テ舉證ス可キ相手方ノ主張ヲ正當ナリト認ムルヲ得

第三百六十五條 訴訟無能力者ノ法律上代理人カ訴訟ヲ爲スキハ法律上代理人若クハ訴訟無能力者ヲ訊問ス可キ又ハ此等ノ者ヲ共ニ訊問ス可キハ裁判所ノ意見ヲ以テ之ヲ決定ス

法律上代理人數人アルキハ其一人ヲ訊問ス可キ又ハ數人ヲ訊問ス可キヤモ亦前項ニ同シ



第十一節 證據保全

第三百六十六條 證據ヲ紛失シ又ハ之ヲ使用シ難キノ恐アル  
キハ證據保全ノ爲メ證人若クハ鑑定人ノ訊問又ハ檢證ヲ申  
立ツルコトヲ得

第三百六十七條 訴訟カ既ニ繫屬シタルキハ此申請ハ受訴裁  
判所ニ之ヲ爲ス可シ

切迫ナル危險ノ場合ニ於テハ訊問ヲ受ク可キ者ノ現在地又  
ハ檢證ス可キ物ノ所在地ヲ管轄スル區裁判所ニ申請ヲ爲ス  
コトヲ得

訴訟ノ未タ繫屬セサルキハ前項ニ記載シタル區裁判所ニ申  
請ヲ爲スコトヲ要ス

右申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得  
第三百六十八條 申請ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一 相手方ノ表示

第二 證據調ヲ爲ス可キ事實

第三 證據方法殊ニ證人若クハ鑑定人ノ訊問ヲ爲ス可キ  
キハ其表示

第四 證據ヲ紛失シ又ハ之ヲ使用シ難キノ恐アル理由此  
理由ハ之ヲ説明ス可シ

第三百六十九條 申請ニ付テノ決定ハ口頭辯論ヲ經スシテ之  
ヲ爲スコトヲ得

申請ヲ許容スル決定ニハ證據調ヲ爲ス可キ事實及ヒ證據方  
法殊ニ訊問ス可キ證人若クハ鑑定人ノ氏名ヲ記載ス可シ此  
決定ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

第三百七十條 證據調ノ期日ニハ申立人ヲ呼出シ又決定及ヒ  
申請ノ謄本ヲ送達シテ其權利防衛ノ爲メニ相手方ヲモ呼出



ス可シ

切迫ナル危険ノ場合ニ於テハ適當ナル時間ニ相手方ヲ呼出  
ス可シ得サリシキト雖モ證據調ヲ妨クルコト無シ

第三百七十一條 證據調ハ本章第六節第七節及ヒ第九節ノ規  
定ニ從ヒ之ヲ爲ス

證據調ノ調書ハ證據調ヲ命シタル裁判所ニ之ヲ保存ス可シ  
各當事者ハ證據調ノ調書ヲ訴訟ニ於テ使用スルノ權利アリ  
受訴裁判所ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ再度ノ證據調ヲ命  
シ又ハ既ニ調ヘタル證據ノ補充ヲ命スルコトヲ得

第三百七十二條 證據調ハ第三百六十六條ノ條件ナキト雖  
モ相手方ノ承諾ニ因リ之ヲ許スコトヲ得

第三百七十三條 申立人カ相手方ヲ指定セサルキハ申立人自  
己ノ過失ニ非スシテ相手方ヲ指定シ能ハサルコトヲ疏明スル

場合ニ限り其申請ヲ許ス

申請ヲ許容シタルキハ裁判所ハ其知レサル相手方ノ權利防  
衛ノ爲メニ臨時代理人ヲ任スルコトヲ得

## 第二章 區裁判所ノ訴訟手續

### 第一節 通常ノ訴訟手續

第三百七十四條 區裁判所ノ通常ノ訴訟手續ニ付テハ區裁判  
所ノ構成又ハ第一編及ヒ本節ノ規定ニ依リ差異ノ生セサル  
キニ限り地方裁判所ノ訴訟手續ニ付テノ規定ヲ適用ス

第三百七十五條 訴ハ書面又ハ口頭ヲ以テ裁判所ニ之ヲ爲ス  
コトヲ得

第三百七十六條 起訴アリタルキハ裁判所書記ハ訴狀又ハ調  
書ノ謄本ヲ被告ニ送達セシム

準備書面ノ交換ハ之ヲ爲スコトヲ要セス



第三百七十七條 原告若クハ被告ハ豫メ通知スルニ非サレハ相手方ニ於テ陳述ヲ爲シ得ヘカラサル申立及ヒ事實上ノ主張ヲ口頭辯論ノ前直接ニ相手方ニ通知スルヲ得

第三百七十八條 口頭辯論ノ期日ト訴狀送達トノ間ニ少ナク三日ノ期間ヲ存スルヲ要ス急迫ナル場合ニ於テハ此時間ヲ二十四時マテニ短縮スルヲ得  
送達ヲ外國ニ於テ爲ス可キハ情況ニ應シテ時間ヲ定ム可シ

第三百七十九條 當事者ハ通常ノ裁判日ニ於テハ豫メ期日ノ指定ナクシテ裁判所ニ出頭シ訴訟ニ付キ辯論ヲ爲スヲ得  
此場合ニ於テ訴ノ提起ハ口頭ノ演述ヲ以テ之ヲ爲ス  
第三百八十條 數回ノ妨訴ノ抗辯ヲ同時ニ且本案ノ辯論前ニ提出ス可キノ規定ハ裁判所管轄違ノ抗辯ニ限り之ヲ適用ス

被告ハ妨訴ノ抗辯ニ基キ本案ノ辯論ヲ拒ムノ權利ナシ然レモ裁判所ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ右抗辯ニ付キ分離シタル辯論ヲ命スルヲ得

第三百八十一條 第二百二十四條、第二百六十七條乃至第七十三條ノ規定ハ區裁判所ノ訴訟手續ニ之ヲ適用セス然レモ原告若クハ被告ノ申立及ヒ陳述ハ裁判所ノ意見ニ從ヒ訴訟關係ヲ十分ニ明確ナラシムル爲メ必要ナルモノニ限り調書ヲ以テ之ヲ明確ナラシム可シ  
第三百八十二條 訴ヲ起サントスル者ハ和解ノ爲メ請求ノ目的物ヲ開示シテ相手方ヲ其普通裁判籍ヲ有スル區裁判所ニ呼出ス可キヲ申立ツルヲ得其申立ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スヲ得  
當事者雙方出頭シ和解ノ調ヒタルキハ調書ヲ以テ之ヲ明確



ナラシム可シ  
和解ノ調ハサルキハ當事者雙方ノ申立ニ因リ其訴訟ニ付キ  
直チニ辯論ヲ爲ス此場合ニ於ケル訴ノ提起ハ口頭ノ演述ヲ  
以テ之ヲ爲ス  
相手方カ出頭セス又ハ和解ノ調ハサルキハ此カ爲メニ生シ  
タル費用ハ訴訟費用ノ一分ト看做ス

### 第二節 督促手續

第三百八十三條 一定ノ金額ノ支拂其他ノ代替物若クハ有價  
證券ノ一定ノ數量ノ給付ヲ目的トスル請求ニ付キ債權者ハ  
通常ノ訴訟手續ニ依ラスシテ督促手續ニ依リ條件付ノ支拂  
命令ヲ債務者ニ對シ發センコトヲ申立ツルコトヲ得  
申請ノ旨趣ニ依レハ申請者反對給付ヲ爲スニ非サレハ其請  
求ヲ主張スルコトヲ得サルキ又ハ支拂命令ノ送達ヲ外國ニ於

テ爲ン若クハ公示送達ヲ以テ爲ス可キキハ督促手續ヲ許サ  
ス

### 第三百八十四條 支拂命令ハ區裁判所之ヲ發ス

此命令ハ區裁判所ノ第一審ノ物上管轄ノ制限ナキモノト看  
做シ通常ノ訴訟手續ニ於ケル訴ノ提起ニ付キ普通裁判籍又  
ハ不動産上裁判籍ノ屬ス可キ區裁判所ノ管轄ニ專屬ス  
第三百八十五條 支拂命令ヲ發スルコトノ申請ハ書面又ハ口頭  
ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

其申請ハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一 當事者及ヒ裁判所ノ表示

第二 請求ノ一定ノ數額、目的物及ヒ原因若シ請求ノ數箇  
ナルキハ其各箇ノ一定ノ數額、目的物及ヒ原因

第三 支拂命令ヲ發センコトノ申立



第三百八十六條 裁判所ハ申請ヲ調査シ其申請カ前三條ノ規定ニ適當セス又ハ申請ノ旨趣ニ於テ請求ノ理由ナク又ハ現時理由ナキコトノ顯ハル、キハ其申請ヲ却下ス  
請求ノ一分ノミニ付キ支拂命令ヲ發スルコトヲ得サルキハ亦其申請ヲ却下ス然レモ數箇ノ請求中或ルモノニ理由ナクシテ其他ノモノニ理由アリト見ユルキハ其理由アリト見ユルモノニ限り申請ヲ許容ス  
右却下ノ命令ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス然レモ通常ノ訴訟手續ニ依リ訴追スルヲ妨クルコト無シ  
第三百八十七條 支拂命令ハ豫メ債務者ヲ審訊セスシテ之ヲ發ス  
支拂命令ニハ第三百八十五條第一號及ヒ第二號ニ掲ケタル申請ノ要件ヲ記載シ且即時ノ強制執行ヲ避ケント欲セハ此

命令送達ノ日ヨリ十四日ノ期間内ニ請求ヲ満足セシメ及ヒ其手續ノ費用ニ付キ定ムル數額ヲ債權者ニ辨済ス可ク又ハ裁判所ニ異議ヲ申立ツ可キ旨ノ債務者ニ對スル命令ヲ記載ス可シ  
前項ノ期間ハ爲替ヨリ生スル請求ニ付テハ二十四時間其地ノ請求ニ付テハ申立ニ因リ三日マテニ之ヲ短縮スルコトヲ得  
第三百八十八條 權利拘束ノ効力ハ支拂命令ヲ債務者ニ送達スルヲ以テ始マル  
第三百八十九條 支拂命令ヲ送達シタルキハ其旨ヲ債權者ニ通知ス可シ  
第三百九十條 債務者ハ支拂命令ニ對シ書面又ハ口頭ヲ以テ異議ノ申立ヲ爲スコトヲ得但其理由ヲ開示スルコトヲ要セス  
第三百九十一條 債務者カ請求ノ全部又ハ一分ニ對シ適當ナ



ル時間ニ異議ヲ申立ツルキハ支拂命令ノ効力ヲ失ヒ權利拘束ノ効力ヲ存續ス然レモ數箇ノ請求中或ルモノニ對シ異議ヲ申立テタルキハ支拂命令ハ其地ノ請求及ヒ之ニ相當スル費用ノ部分ニ付キ効力ヲ有ス

第三百九十二條 適當ナル時間ニ異議ヲ申立テタル場合ニ於テ請求ニ付キ起ス可キ訴カ區裁判所ノ管轄ニ屬スルキハ其訴ハ支拂命令ノ送達ト同時ニ區裁判所ニ之ヲ起シタルモノト看做ス其口頭辯論ノ期日ハ第三百七十八條ノ規定ニ從ヒ之ヲ定ム

第三百九十三條 請求ニ付キ起ス可キ訴カ地方裁判所ノ管轄ニ屬スル場合ニ於テハ適當ナル時間ニ異議ノ申立アリタルトテ債權者ニ通知ス可シ  
債權者其通知書ノ送達アリタル日ヨリ起算シ一个月ノ期間

内ニ管轄裁判所ニ訴ヲ起サ、ルキハ權利拘束ノ効力ヲ失フ  
第三百九十四條 督促手續ノ費用ハ適當ナル時間ニ異議ノ申立アリタル場合ニ於テハ起ス可キ訴訟ノ費用ノ一分ト看做ス

前條ノ場合ニ於テ期間内ニ訴ヲ起サ、ルキハ手續ノ費用ハ債權者ノ負擔ニ歸ス

第三百九十五條 支拂命令ハ其命令中ニ掲ケタル期間ノ經過後債權者ノ申請ニ因リ之ヲ假ニ執行シ得ヘキヲ宣言ス但假執行ノ宣言前債務者異議ヲ申立テサルキニ限ル  
右假執行ノ宣言ハ支拂命令ニ付ス可キ執行命令ヲ以テ之ヲ爲ス其執行命令ニハ債權者ニ於テ計算スル訴訟手續ノ費用ヲ掲ク可シ  
債權者ノ申請ヲ却下スル決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲ス



ヲ得

第三百九十六條 執行命令ハ懈怠ニ因リ言渡ス假執行ノ宣言ヲ付シタル終局判決ト同一ナリトス其執行命令ニ對シテハ第二百五十六條乃至第二百六十五條ノ規定ニ從ヒ故障ヲ申立ツルコトヲ得請求カ區裁判所ノ管轄ニ屬セサルキハ區裁判所ハ其故障ヲ法律上ノ方式及ヒ期間ニ於テ申立テタルヤノ點ノミニ付キ辯論及ヒ裁判ヲ爲ス此場合ニ於テハ第三百九十三條第二項ニ定メタル期間ハ故障ヲ許ス判決ノ確定ヲ以テ始マル

第三百九十七條 時期ニ後レテ申立テタル異議ハ命令ヲ以テ之ヲ却下ス

此却下ノ命令ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

### 第三編 上訴

#### 第一章 控訴

第三百九十八條 控訴ハ區裁判所又ハ地方裁判所ノ第一審ニ於テ爲シタル終局判決ニ對シ之ヲ爲ス

第三百九十九條 終局判決前ニ爲シタル裁判ハ亦控訴裁判所ノ判斷ヲ受クルモノトス但此法律ニ於テ不服ヲ申立ツルコトヲ得スト明記セサルキ又ハ抗告ヲ以テ不服ヲ申立ツルコトヲ得サルキニ限ル

第四百條 闕席判決ニ對シテハ期日ヲ懈怠シタル者ヨリ控訴ヲ以テ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス但故障ヲ許サル闕席判決ニ對シテハ懈怠ナカリシコトヲ理由トスルキニ限り控訴ヲ以テ不服ヲ申立ツルコトヲ得

第四百一條 控訴ハ口頭辯論ノ前ニ於テハ被控訴人ノ承諾ヲ



クシテ之ヲ取下クルヲ得

控訴ノ取下ハ上訴權ヲ喪失スルノ結果ヲ生ス

第四百二條 控訴期間ハ一个月トス此期間ハ不變期間ニシテ

判決ノ送達ヲ以テ始マル

判決ノ送達前ニ提起シタル控訴ハ無効トス

第二百四十三條ノ規定ニ從ヒ控訴期間内ニ追加裁判ヲ以テ

判決ヲ補充シタルキハ控訴期間ノ進行ハ最初ノ判決ニ對ス

ル控訴ニ付テモ追加裁判ノ送達ヲ以テ始マル

第四百三條 控訴ノ提起ハ控訴狀ヲ控訴裁判所ニ差出シテ之

ヲ爲ス

第四百四條 控訴狀ニハ左ノ諸件ヲ具備スルヲ要ス

第一 控訴セラル、判決

第二 此判決ニ對シ控訴ヲ爲ス旨ノ陳述

第四百五條 準備書面ニ關スル一般ノ規定ハ控訴狀ニモ亦之

ヲ適用ス

準備書面タル控訴狀ニハ特ニ左ノ諸件ヲ具備ス可シ

第一 判決ニ對シ不服ヲ申立ツル部分及ヒ其判決ニ付キ

申立ツル變更ノ理由

第二 主張セントスル新ナル事實及ヒ證據方法

第三 一定ノ申立

第四百六條 判然許ス可カラサル控訴又ハ判然法律上ノ方式

ニ適セス若クハ其期間ノ經過後ニ起シタル控訴ハ訴訟指揮

上ノ命令ヲ以テ之ヲ却下ス

此却下ノ命令ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スヲ得

第四百七條 控訴狀ノ送達ト口頭辯論ノ期日トノ間ニ存ス可

キ時間ニ付テハ第九十五條ノ規定ヲ適用シ答辯書ヲ差出



ス可キ期間ノ催告ニ付テハ第二百條ノ規定ヲ適用ス  
前項ノ場合ニ於テモ亦第二百四條ノ規定ヲ適用スルヲ得  
第四百八條 答辯書ハ準備書面ニ關スル一般ノ規定ニ從ヒ之  
ヲ作り且被控訴人ノ一定ノ申立及ヒ其主張セントスル新ナ  
ル事實及ヒ證據方法ヲ掲ク可シ

第四百九條 被控訴人ハ自己ノ控訴ヲ拋棄シタルキ又ハ控訴  
期間ノ經過シタルキト雖モ附帶控訴ヲ爲スヲ得

闕席判決ニ對シ控訴ヲ以テ不服ヲ申立ツルニ付テノ規定ハ  
附帶控訴ニ因テ闕席判決ニ對シ不服ヲ申立ツルニモ亦之ヲ  
適用ス

第四百十條 左ノ場合ニ於テハ附帶控訴ハ其効力ヲ失フ

- 第一 控訴ヲ不適法トシテ判決ヲ以テ棄却シタルキ
- 第二 控訴ヲ取下ケタルキ

被控訴人カ控訴期間内ニ附帶控訴ヲ爲シタルキハ之ヲ獨立  
ノ控訴ト看做ス

第四百十一條 答辯書ニ新ナル事實若クハ證據方法ヲ掲ケ又  
ハ附帶控訴ヲ爲ス旨ノ陳述ヲ掲クルキハ之ヲ控訴人ニ送達  
ス可シ

第四百十二條 右ノ外控訴ノ訴訟手續ニハ地方裁判所ニ於ケ  
ル第一審ノ訴訟手續ノ規定ヲ準用ス但本章ノ規定ニ依リ差

異ノ生スルモノハ此限ニ在ラス

第四百十三條 當事者ノ雙方ヨリ控訴ヲ起シタルキハ其兩控  
訴ニ付キ辯論及ヒ裁判ヲ同時ニ爲スヲ通例トス

第四百十四條 口頭辯論ハ其期日ニ於テ被控訴人ノ控訴期間  
ノ未タ經過セサルキハ其申立ニ因リ期間ノ滿了マテ之ヲ延

期ス



闕席判決ヲ受ケタル原告若クハ被告ヨリ其判決ニ對シ故障  
ヲ申立テ相手方ヨリ控訴ヲ起シタルキハ控訴ニ付テノ辯論  
及ヒ裁判ハ故障ノ完結マテ職權ヲ以テ之ヲ延期ス  
第四百十五條 控訴裁判所ニ於ケル訴訟ハ不服ノ申立ニ因リ  
定マリタル範圍内ニ於テ更ニ之ヲ辯論ス  
第四百十六條 當事者ハ其控訴ノ申立ヲ會得セシムル爲メ及  
ヒ不服ヲ申立テラレタル裁判ノ當否ヲ調査スル爲メ必要ナ  
ル限りハ口頭辯論ノ際第一審ニ於ケル辯論ノ結果ヲ演述ス  
可シ  
演述ノ不正確又ハ不完全ナル場合ニ於テハ裁判長ハ其更正  
若クハ補完ヲ爲サシメ又必要ナル場合ニ於テハ辯論ヲ再開  
シテ之ヲ爲サシム可シ  
第四百十七條 訴ノ變更ハ相手方ノ承諾アルキト雖モ之ヲ許

サス

第四百十八條 妨訴ノ抗辯ハ職權ヲ以テ調査ス可カラサルモ  
ノニシテ且原告若クハ被告カ其過失ニ非スシテ第一審ニ於  
テ提出シ能ハサリシトナテ疏明スルキニ限り之ヲ主張スルト  
テ得  
本案ノ辯論ハ妨訴ノ抗辯ニ基キ之ヲ拒ムトテ得ス然レモ裁  
判所ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ妨訴ノ抗辯ニ付キ分離シ  
タル辯論ヲ命スルヲ得  
第四百十九條 當事者ハ第一審ニ於テ主張セサリシ攻撃防禦  
ノ方法殊ニ新ナル事實及ヒ證據方法ヲ提出スルヲ得  
第四百二十條 新ナル請求ハ第九十七條第二號及ヒ第三號  
ノ場合ヲ除クノ外相殺スルヲ得ヘキモノニシテ且原告若  
クハ被告カ其過失ニ非スシテ第一審ニ於テ提出シ能ハサリ



シテヲ疏明スルキニ限り之ヲ起スヲ得

第四百二十一條 事實又ハ證書ニ付キ第一審ニ於テ爲サ、ル陳述又ハ拒ミタル陳述ハ第二審ニ於テ之ヲ爲スヲ得

第四百二十二條 第一審ニ於テ爲シタル裁判上ノ自白ハ第二審ニ於テモ亦其効力ヲ有ス

第四百二十三條 控訴裁判所ハ控訴ヲ許ス可キヤ否又控訴ヲ法律上ノ方式ニ從ヒ若クハ其期間ニ於テ起シタルヤ否ヲ職權ヲ以テ調査ス可シ若シ此要件ノ一ヲ缺クキハ判決ヲ以テ控訴ヲ不適法トシテ棄却ス可シ

第四百二十四條 第一審ノ裁判ハ變更ヲ申立テタル部分ニ限り之ヲ變更スルヲ得

第四百二十五條 第一審ニ於テ是認シ又ハ非認シタル請求ニ關スル總テノ争點ニシテ申立ニ從ヒ辯論及ヒ裁判ヲ必要ト

スルモノハ第一審ニ於テ此争點ニ付キ辯論及ヒ裁判ヲ爲サ、ルキト雖モ控訴裁判所ニ於テ其辯論及ヒ裁判ヲ爲スモノトス

第四百二十六條 控訴裁判所ハ左ノ場合ニ於テ事件ニ付キ尙

ホ辯論ヲ必要トスルキハ其事件ヲ第一審裁判所ニ差戻ス可シ

第一 不服ヲ申立テラレタル判決カ闕席判決ナルキ

第二 不服ヲ申立テラレタル判決カ闕席判決ニ對スル故障ヲ不適法トシテ棄却シタルモノナルキ

第三 不服ヲ申立テラレタル判決カ妨訴ノ抗辯ノミニ付キ裁判ヲ爲シタルモノナルキ

第四 請求カ其原因及ヒ數額ニ付キ争アル場合ニ於テ不服ヲ申立テラレタル判決カ先ツ其原因ニ付キ裁判ヲ爲



シタルモノナルキ

第五 不服ヲ申立テラレタル判決カ證書訴訟及ヒ爲替訴訟ニ於テ敗訴ノ被告ニ別訴訟ヲ以テ追行ヲ爲スノ權ヲ保留シタルモノナルキ

第四百二十七條 第一審ニ於テ訴訟手續ニ付テノ規定ニ違背シタルキハ控訴裁判所ハ其判決及ヒ違背シタル訴訟手續ノ部分ヲ廢棄シ事件ヲ第一審裁判所ニ差戻スヲ得

第四百二十八條 控訴ノ理由ナシトスルキハ判決ヲ以テ控訴ノ棄却ヲ言渡ス可シ

第四百二十九條 判決ヲ控訴人ノ不利益ニ變更スルコトハ相手方カ控訴又ハ附帶控訴ノ方法ヲ以テ判決ニ付キ不服ヲ申立テタル部分ニ限り之ヲ爲スヲ得

第四百三十條 第二百十一條ノ規定ニ從ヒ防禦ノ方法ヲ却下

スルキハ其防禦ノ方法ヲ主張スルノ權ハ之ヲ被告ニ留保ス可シ

判決ニ此留保ヲ掲ケサルキハ第二百四十三條ノ規定ニ從ヒ判決ノ補充ヲ申立ツルコトヲ得

留保ヲ掲ケタル判決ハ上訴及ヒ強制執行ニ付テハ終局判決ト看做ス

第四百三十一條 防禦ノ方法ニシテ被告ニ其主張ヲ留保スルモノニ付テハ其訴訟ハ第二審ニ繫屬スルモノトス  
爾後ノ手續ニ於テ訴ヲ以テ主張シタル請求ノ理由ナカリシコトノ顯ハル、キニ限り前判決ヲ廢棄シテ其訴ヲ棄却シ且申立ニ因リ判決ニ基キ支拂ヒタルモノ又ハ給付シタルモノヲ返還ス可キヲ言渡シ並ニ費用ニ付キ裁判ヲ爲ス可シ  
第四百三十二條 控訴人カ口頭辯論ノ期日ニ出頭セサルキハ



出頭シタル被控訴人ノ申立ニ因リ闕席判決ヲ以テ控訴ノ棄却ヲ言渡ス可シ

第四百三十三條 被控訴人口頭辯論ノ期日ニ出頭セサル場合ニ於テ出頭シタル控訴人ヨリ闕席判決ノ申立ヲ爲スルハ第一審裁判ノ憑據ト爲リタルモノニ牴觸セサル控訴人ノ事實上ノ供述ハ被控訴人之ヲ自白シタルモノト看做シ且第一審裁判所ノ事實上ノ確定ヲ補充シ若クハ辯駁スル爲メ控訴人ノ申立テタル適法ノ證據調ハ既ニ之ヲ爲シ及ヒ其結果ヲ得タルモノト看做ス可シ

第四百三十四條 判決中ノ事實ノ摘示ニ付テハ前審ノ判決ヲ引用スルヲ得

第四百三十五條 控訴裁判所ノ書記ハ控訴狀ノ提出ヨリ二十四時間ニ第一審裁判所ノ書記ニ訴訟記録ノ送付ヲ求ム可シ

控訴完結ノ後其記録ハ第二審ニ於テ爲シタル判決ノ認證アル謄本ト共ニ第一審裁判所ノ書記ニ之ヲ返還ス可シ

## 第二章 上告

第四百三十六條 上告ハ地方裁判所及ヒ控訴院ノ第二審ニ於テ爲シタル終局判決ニ對シ之ヲ爲ス

第四百三十七條 終局判決前ニ爲シタル裁判ハ亦上告裁判所ノ判斷ヲ受クルモノトス但此法律ニ於テ不服ヲ申立ツルヲ得スト明記セサルキ又ハ抗告ヲ以テ不服ヲ申立ツルヲ得サルキニ限ル

第四百三十八條 上告ハ法律ニ違背シタル裁判ナルヲ理由トスルキニ限り之ヲ爲スヲ得

第四百三十九條 法則ヲ適用セス又ハ不當ニ適用シタルキハ法律ニ違背シタルモノトス



第四百四十條 裁判ハ左ノ場合ニ於テハ常ニ法律ニ違背シタルモノト看做ス

- 第一 規定ニ從ヒ判決裁判所ヲ構成セサリシキ
- 第二 法律ニ依リ職務ノ執行ヨリ除斥セラレタル判事カ裁判ニ參與シタルキ但忌避ノ申請又ハ上訴ヲ以テ除斥ノ理由ヲ主張シタルモ其効ナカリシキハ此限ニ在ラス
- 第三 判事カ忌避セラレ且忌避ノ申請ヲ理由アリト認めタルニ拘ハラス裁判ニ參與シタルキ
- 第四 裁判所カ其管轄又ハ管轄違テ不當ニ認めタルキ
- 第五 訴訟手續ニ於テ原告若クハ被告カ法律ノ規定ニ從ヒ代理セラレサリシキ
- 第六 訴訟手續ノ公行ニ付テノ規定ニ違背シタル口頭辯論ニ基キ裁判ヲ爲シタルキ

第七 裁判ニ理由ヲ付セサルキ

第四百四十一條 上告期間ハ一个月トス此期間ハ不變期間ニシテ判決ノ送達ヲ以テ始マル

判決ノ送達前ニ提起シタル上告ハ無効トス

第四百四十二條 上告人ハ上告ノ提起前ニ上告金十圓ヲ上告裁判所書記課ニ預ク可シ但訴訟上ノ救助ヲ受ケタルキハ此限ニ在ラス

判決ヲ破毀シタル場合ニ於テハ上告金ヲ還付ス

第四百四十三條 左ノ場合ニ於テハ上告金ヲ沒收ス

- 第一 上告ヲ許サ、ル旨判決ヲ以テ言渡シタルキ
- 第二 許シタル上告ヲ理由ナシトシテ判決ヲ以テ棄却シタルキ
- 第三 上告人カ上告ヲ取下ケタルキ



前項ノ場合ニ於テハ訴訟上ノ救助ヲ受ケタル原告若クハ被告ト雖モ上告金ヲ追納スルノ義務アリ此場合ニ於テハ第一百條ノ規定ヲ準用ス

第四百四十四條 上告ノ提起ハ上告狀ヲ上告裁判所ニ差出シテ之ヲ爲ス

第四百四十五條 上告狀ニハ左ノ諸件ヲ具備スルヲ要ス

第一 上告セラル、判決

第二 此判決ニ對シ上告ヲ爲ス旨ノ陳述

第四百四十六條 準備書面ニ關スル一般ノ規定ハ上告狀ニモ亦之ヲ適用ス

準備書面タル上告狀ニハ特ニ判決ニ對シ不服ヲ申立ツル部分及ヒ其判決ニ付キ申立ツル破毀ノ部分ヲ記載シ且上告申立ニ理由ヲ付スル爲メ左ノ諸件ヲ具備ス可シ

第一 法則ヲ適用セス又ハ不當ニ適用シタルヲ上告ノ理由トスルキハ其法則ノ表示

第二 訴訟手續ニ付テノ規定ニ違背シタルヲ上告ノ理由トスルキハ其欠缺ヲ明カニスル事實ノ表示

第三 法律ニ違背シテ事實ヲ確定シ又ハ遺脱シ又ハ提出シタリト看做シタルヲ上告ノ理由トスルキハ其事實ノ表示

第四百四十七條 上告狀ニハ上告金ノ預リ證書又ハ訴訟上ノ救助ヲ受ケタル證明書ヲ添フ可シ若シ之ヲ添ヘサルキハ上告ヲ提起セサルモノト看做ス

第四百四十八條 上告裁判所ハ上告人ヲ呼出シ其陳述ヲ聽キ上告ヲ許ス可カラサルモノナルキ又ハ法律上ノ方式及ヒ期間ニ於テ起サ、ルキ又ハ第四百三十八條ノ規定ニ依ラサル



※ハ判決ヲ以テ之ヲ棄却ス可シ

上告人カ呼出ノ期日ニ出頭セサルキハ上告ヲ取下ケタルモ  
ノト看做ス但出頭セサリシヲ期日ヨリ七日ノ期間内ニ十  
分ナル理由ヲ以テ辯解シタルキハ更ニ期日ヲ定ム

第四百四十九條 上告狀ノ送達ト口頭辯論ノ期日トノ間ニ存  
ス可キ時間ニ付テハ第九十五條ノ規定ヲ適用シ答辯書  
ヲ差出ス可キ期間ノ催告ニ付テハ第二百條ノ規定ヲ適用  
ス

前項ノ場合ニ於テモ亦第二百四條ノ規定ヲ適用スルヲ得  
第四百五十條 答辯書ハ準備書面ニ關スル一般ノ規定ニ從ヒ  
之ヲ作り且一定ノ申立ヲ掲ク可シ

第四百五十一條 被上告人ハ附帶上告ヲ爲スヲ得  
此附帶上告ニ付テハ附帶控訴ノ規定ヲ準用ス

第四百五十二條 答辯書ニ附帶ノ陳述ヲ掲ケタルキハ之ヲ上  
告人ニ送達ス可シ

第四百五十三條 右ノ外上告ノ訴訟手續ニハ地方裁判所ノ第  
一審訴訟手續ノ規定ヲ準用ス但本章ノ規定ニ依リ差異ノ生  
スルモノハ此限ニ在ラス

第四百五十四條 上告裁判所ハ當事者ノ爲シタル申立ノミニ  
付キ調査ヲ爲ス

第四百五十五條 上告裁判所ハ裁判ヲ爲スニ付キ控訴裁判所  
カ其裁判ノ憑據トシタル事實ヲ標準トス此事實ノ外ハ第四  
百四十六條第二號及ヒ第三號ニ掲ケタル事實ニ限り之ヲ斟  
酌スルヲ得

證據調ヲ必要トスルキハ上告裁判所ハ之ヲ命ス可シ  
第四百五十六條 上告ヲ理由アリトスルキハ不服ヲ申立テラ



レタル判決ヲ破毀ス可シ

訴訟手續ニ關スル規定ニ違背シタルニ因リ判決ヲ破毀スル  
キハ其違背シタル部分ニ限リ訴訟手續ヲモ亦破毀ス可シ

第四百五十七條 判決ヲ破毀スル場合ニ於テハ第四百六十條  
ノ規定ヲ除クノ外更ニ辯論及ヒ裁判ヲ爲サシムル爲メ事件  
ヲ控訴裁判所ニ差戻シ又ハ之ヲ他ノ同等ナル裁判所ニ移送  
ス可シ

事件ノ差戻又ハ移送ヲ受ケタル裁判所ハ新口頭辯論ニ基キ  
裁判ヲ爲ス可シ要ス

第四百五十八條 當事者ハ破毀セラレタル判決ノ以前ニ於ケ  
ル口頭辯論ニ當リ提出スル可シ得ヘカリシ事項ヲ新口頭辯  
論ニ際シ提出スルノ權利アリ

第四百五十九條 事件ノ差戻又ハ移送ヲ受ケタル裁判所ハ上

告裁判所ノ爲シタル法律ニ係ル判斷ニシテ判決ヲ破毀スル  
ノ基本トシタルモノヲ以テ新ナル辯論及ヒ裁判ノ基本ト爲  
スノ義務アリ

第四百六十條 上告裁判所ハ左ノ場合ニ於テ事件ニ付キ裁判  
ヲ爲ス可シ

第一 確定シタル事實ニ法律ヲ適用スルニ當リ法律ニ違  
背シタル爲メニ判決ヲ破毀シ且其事件カ裁判ヲ爲スニ  
熟スルキ

第二 無訴權ノ爲メ又ハ裁判所ノ管轄違ナル爲メニ判決  
ヲ破毀スルキ

第四百六十一條 上告ヲ理由ナシトスルキハ之ヲ棄却ス可シ  
第四百六十二條 裁判カ其理由ニ於テ法律ニ違背シタルキト  
雖モ他ノ理由ニ因リ裁判ノ正當ナルキハ上告ヲ棄却ス可シ



第四百六十三條 左ノ諸件ニ關スル控訴ノ規定ハ上告ニ之ヲ

準用ス

第一 闕席判決ニ對スル不服ノ申立

第二 控訴ノ取下

第三 當事者ノ雙方ヨリ控訴ヲ起シタル場合ニ於ケル訴訟手續及ヒ控訴ト故障トヲ同時ニ爲シタルキノ訴訟手續

續

第四 口頭辯論ノ延期

第五 口頭辯論ノ際ニ於ケル當事者ノ演述

第六 妨訴ノ抗辯ニ付テノ辯論

第七 控訴ヲ起シタル者ノ不利益ト爲ル裁判ヲ爲ス可カラサルヲ

第八 記録ノ送付並ニ返還

第三章 抗告

第四百六十四條 抗告ハ此法律ニ於テ特ニ掲ケタル場合ノ外

尙ホ口頭辯論ヲ經スシテ爲シタル左ノ裁判ニ對シ之ヲ爲スヲ得

第一 訴訟手續ニ關スル申請ヲ却下シタル決定及ヒ命令

第二 強制執行手續ニ於テ爲シタル決定及ヒ命令

第四百六十五條 抗告ニ付テハ直近ノ上級裁判所其裁判ヲ爲ス

抗告裁判所ノ裁判ニ對シテハ其裁判ニ因リ新ナル獨立ノ抗告理由ヲ生シタルキニ非サレハ更ニ抗告ヲ爲スヲ得ス

第四百六十六條 抗告ハ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所又ハ裁判長ノ屬スル裁判所ニ抗告狀ヲ差出シテ之ヲ爲ス